

テレビと家族の50年

“テレビ的”一家団らんの変遷

●世論調査部 井田美恵子



街頭テレビなどの普及初期を除き、人々はテレビ放送のほとんどを家庭内で見てきた。それは、家族という人間関係の中でテレビを見てきたということでもある。またテレビは家庭と社会をつなぐ窓であり、この窓を通して人々は社会のさまざまな出来事や価値観を知った。

テレビ放送開始50年を機に、テレビと家庭・家族の関係がどのように変遷してきたのかをたどることが本稿の目的である。この50年間は、家庭内でのテレビ視聴の様子やテレビ視聴時間、社会・経済状況などから大きく3つの時期に区分でき、テレビと家族の関係の変遷は次のようにまとめられる。

第1期 1953～1974年：濃密な家族視聴の誕生

第2期 1975～1984年：個別視聴のきざしと家族視聴の変質

第3期 1985～現在：個別視聴の拡大とテレビとの団らん

まず第1期ではテレビの物珍しさや楽しさから家族がテレビの前に集まり、テレビは戦後の新しい家族の「中心」となった。そしてテレビをみんなで見るのが家族の一体感を高め、テレビを見ながら家族と交流する“テレビ的”一家団らんが生まれることとなった。しかし第2期で家庭内のテレビ台数が増加することに伴い、家族メンバーが個々にテレビを見るようになり、テレビが家族を分散するようになった。その一方で、分散した家族と一緒にいるためのテレビ視聴が併存し、テレビが家族の間をとりもつ役割も果たしていた。そして第3期になると一人でテレビを見る個別視聴がさらに進み、人々はテレビ番組の中の出演者と団らんするようになった。たとえ一人でいても、テレビをつけておくことで、あたかも一家団らんしているような雰囲気醸成が醸し出されるようになったのである。

第1期に現われた“テレビ的”一家団らんは、「家族みんなで」するものから「家族のメンバー一人ひとりで」するものへと変質しつつある。



はじめに	112	Ⅱ 家族をつなぎとめるテレビ	122
1. 目的と構成		1. テレビの魅力にかげり	
2. テレビ以前		2. 家族を分散させるテレビ	
Ⅰ テレビは家族の新しい絆	115	3. 家族の空白をうめるテレビ	
1. 普及すべくして普及したテレビ		Ⅲ テレビは私のアンテナ	130
2. テレビが教えてくれた戦後日本の理想の家庭像・家族像		1. ドラマも視聴も家族から個人へ	
3. “テレビ的”一家団らんの形成		2. テレビと団らんする人々	
		3. 私を包み込むテレビ	
		おわりに	138

はじめに

1. 目的と構成

2003年2月、テレビは放送開始50年を迎えた。テレビ放送が始まった当時、テレビは一人で見るものではなく、家族と一緒に見るものであった。人々は夢中になってテレビを見、どの番組を見るかということまで兄弟げんかがおきるくらい熱かった。家族が集まり、会話を交わしながら、または食事をしながら見るテレビは、戦後の日本の家庭に最大級の楽しみをもたらしたといっても過言ではないだろう。

ところが50年もたつと、テレビはすっかり当たり前前の存在になってしまった。テレビ以外にも私たちを楽しませてくれる情報機器が部屋中にあふれている。ビデオ、CD・MD・DVDプレーヤー、テレビゲーム、パソコン、携帯電話……。もはやテレビだけが娯楽ではない。さらに、テレビは家族で見るものから一人で見るものへと変わりつつある。見たい番組があれば自分の部屋にもどって、自分のテレビで見ればよい。家族みんなで見るとも一人で見るほうがテレビを楽しめるときすらある。家族みんなで同じ番組を見ることが頻繁なのは、子どもが小さいころの一時期になってしまった。

なぜこんなにテレビと家族の関係は変わってしまったのだろうか。この50年の間に、テレビと家族の間に何がおきたのだろうか。

これからのテレビを考えるために、テレビがこれまで見られてきた家庭という場や家族という人間関係に注目し、テレビと家族の関係がどのようなものであったのかを、経済・社会状況をふまえてつたどっていきたいと思

う。言いかえれば、テレビ視聴と家族の関係についてその歴史的変遷をたどる試みということである。

テレビ視聴と家族については、過去に当研究所の研究者によるいくつかの先行研究がある。代表的なものは、

小川文弥

- ・「家庭生活とテレビ」『国民生活研究』第23巻第1号1983年6月号

藤竹 暁

- ・「テレビと家庭生活」『現代のエスプリ 放送文化』1984年（初出は1979年）
- ・「テレビ文化環境論」『放送学研究33 テレビ新時代』1981年

本田妙子・牧田徹雄

- ・「家族とテレビ」『文研月報』1979年7月号、8月号

である。

残念なことに、1980年代半ば以降、テレビ視聴と家族という視点での研究はあまりなされていない。これは、後述するように、このころから個人視聴が注目されはじめ、視聴者それ自身の特性（どのような人がどのような番組を視聴するのか）に研究の関心が移ったことが影響していると思われる。

そこで、1980年代半ばまでの研究成果に、それ以降今日までのテレビ視聴と家族の関係についての考察を加え、この半世紀を振り返ってみたいと思う。

テレビ視聴と家族の50年を振り返るために、家庭内でのテレビ視聴の様子はもちろんのこと、テレビ視聴時間、社会・経済状況などにも注目し、次のように3つの時期を設定した。

第1期：テレビ普及と家族視聴の時期

1953～1974年

第2期：テレビと家族の関係が揺らぎだした時期
1975～1984年

第3期：個別視聴が進行した時期
1985年～現在

西暦年はだいたいの目安であり、その年で明確に分けられるというものではないことを断っておく。

これら3つの時期におけるテレビと家族の関係について記述し、その関係がどう変化したのか、さらにその変化を引き起こした諸要因について考えていくのが、本稿の構成である。また、各時期ごとの分析では、テレビに映し出されたもう1つの家族という意味で「ホームドラマ」の内容にも着目する。

2. テレビ以前

本論に入る前に、テレビが登場する以前の家庭がいったいどのような様子だったのかを簡単におさえておきたい。つまり、どのような家庭の雰囲気の下に、テレビがやってきたのかということである。

家庭の雰囲気を象徴するものとして、2つのことをとりあげたい。1つは家族みんながそろって「食事風景」、もう1つはテレビ以前の家庭内のメディア娯楽であった「ラジオ」である。

(1) 食事風景

昔も今も家族が集まるときといえば、食事であろう。ここでは明治時代から戦後テレビ放送が始まったころまでの食事風景をたどってみるが、食卓の移り変わりを簡単に示すと、「銘々膳」→「チャブ台」→「ダイニング・テーブル」となる。食卓の移り変わりとともに、食事の雰囲気も変化していった。

銘々膳の時代

明治時代前半までは、おもに銘々膳で食事が行われていた。当時の食事の様子は次のようなものだったらしい。

「食卓の光景は、なかなか複雑です。百姓の習慣として、家族の者も雇い人も一緒に飯を食うということがありますが、明治までは徳川の風習が残っているものだから、身分というものが守られていました。

雇い人と一緒に飯を食うにしても、家族の者は一段、20センチメートル位ですが、高いところに座る。銘々膳で、子供も小学校一年生になると箱膳をもらいました。おとなになると、20歳以上が足付きの膳になります。これも父のは立派で、母のは少し格が下がります。雇い人は箱膳でした」明治30年代の新潟県長岡市郊外、地主の家庭での食事風景¹⁾

石毛(1991)は銘々膳での食事の雰囲気を以下のように記している。「家長を頂点とする『家の制度』を反映するかのように、長幼、男女の別の原理をもつ座順にしたがってならべられた銘々膳での食事は、参加する者同士が和気あいあいと食べることを楽しむ性格はすくなく、食事のさいにも緊張関係が存在するもの」であった²⁾。そもそも銘々膳とは、個人用のお膳であるから、一堂に会して食事をしていても一人で膳に向かって食べていることと同じようなものであった。なごやかに食事をするという雰囲気にはほど遠い感がある。

チャブ台の時代

その後、明治後半から戦前にかけて、多くは大正から昭和のはじめにかけて、チャブ台が家庭に取り入れられるようになった(井上

1984)³⁾。チャブ台では家族で1つの卓を囲むようになったが、それでも和気あいあいと食事をするという雰囲気にはならなかったようである。「チャブ台時代になっても、黙々と食事をするのが普通であり、食事中に、とくに子どもがおしゃべりをするのはいけないこととされた」と石毛(1991)は紹介している⁴⁾。「もっとも厳しく言われたのはおしゃべりで、絶対食事中に話をしてはいけなかった。何かを話しておかなくてはならないことも、食事が終わって、そろって“ごちそうさま”を言った後でしか言わなかった」という回想もある⁵⁾。

ただ、食後になれば、家族が昔話を語ってくれるなど、楽しいひとときが待っていた。「夕食後は、家族団らんの時間である。母が昔の話をしたり、家長が自分の持つ知識を子どもたちに教えたり、また世間話をする」、
「食事中のおしゃべりはほとんどしないで、食事は早くすませることになっていた。談話などは、ほりごたつのある別の部屋でしていた」。⁶⁾

ダイニング・テーブルの時代

戦後になり、公団住宅によりダイニング・キッチンという間取りが生み出され、そこにおくためのテーブルと椅子による食卓が登場

した。団地に住む核家族には使用人などはおらず、親とその子どもだけの少人数の家族となり、また戦後の民主化により身分制度や差別も否定されるものとなった。戦後民主主義の浸透と核家族化を背景に、ダイニング・テーブルでの食事が食卓での家族の平等を実現したといえるだろう⁷⁾。「食事中の会話を禁止する風習は消滅した。子どもに食卓でのおしゃべりを禁じる家庭はなくなった」ようである^{8), 9)}。

ダイニング・テーブル時代になり、会話をしながら食事をするのが許されるようになると、食事が楽しいもの変わったと考えられる¹⁰⁾。熊倉(1991)は、「食事と団らんは別個のものであったのが、合体されるところに

表2 NHKラジオ番組 聴取率高位番組 (全国、6月期)

番組名	曜日	時刻	聴取率
三つの歌	月	19:30	54%
のど自慢	日	12:15	46
放送演芸会	水	20:00	46
お父さんはお人好し	月	20:00	46
浪花節	月	20:30	44
ラジオ寄席	日	20:00	42
二十の扉	土	19:30	42
浪花演芸会	木	19:30	40
演芸独演会	金	20:00	38
歌の花ごよみ	木	20:00	36

(1955年聴取率調査)

表1 食事と団らんの関係

食 事		団 ら ん	時 期
食卓の形態	食事中の会話		
銘々膳	厳禁	団らんは食後	～明治前半
↓	↓	↓	
チャブ台	望ましくない	団らんは食後	明治後半～戦前
↓	↓	↓	
テーブル	活発に	食事との一体化	戦後～

近代の食生活の特質があった」とし、戦後のダイニング・テーブル時代になってはじめて、食事と会話が渾然一体となった団らんが登場したことを指摘している¹¹⁾。

ここで、「テレビ以前」の食事と団らんの関係を整理すると表1のようになる。このように、家族で食卓を囲み、会話が許されるようになった家庭に、テレビはちょうどやってきたのである。

(2) ラジオ

次に、家庭内娯楽の1つであるラジオについて簡単にふれておく。テレビが家庭にやってくる前、ラジオは家庭でどのように聴かれていたのだろうか。

ラジオ放送が始まったのは1925年(大正14年)で、ラジオ放送開始のあいさつにおいて当時東京放送局総裁であった後藤新平は、ラジオの「放送事業の職能」として次の4つを挙げた。第1に文化の機会均等、第2に家庭生活の革新、第3に教育の社会化、第4に経済機能の敏活である。2番目の「家庭生活の革新」とは、それまで、「慰安娯楽は家庭の外に求めるのが常であったが、ラジオを囲んで一家団らんし、家庭生活の真趣味(本当のおもむき、真価 筆者注)を味わえるようになる」ということである¹²⁾。

しかし、ラジオが最もよく聴かれたのは戦後に入ってからである。NHKのラジオ受信契約件数が最も多かったのは1958年(昭和33年)で、ラジオ聴取の全盛期は1955年(昭和30年)前後であった。そのころの人気番組は表2のとおりで、聴取者参加番組、演芸、クイズなどの娯楽番組が夜間を中心に非常によく聴かれていた¹³⁾。藤竹(1963)は、「テレビ

が普及する前の一般家庭では、夜の7時から9時にかけていわゆる夕食後の余暇時間を、ラジオを聴いて過ごしている人が多かった」と分析している¹⁴⁾。食後にラジオを聴くというスタイルで、後藤の目指したラジオによる家庭内娯楽が実現していた。こうして、ラジオはテレビによる一家団らんの下地を形成していたのである。



テレビは家族の新しい絆

第1期：1953～1974年

1つには月賦のせいもあった。現金ではとても手が出ないに違いない当時の電気洗濯機をエイヤッと買う気になれたのも、月にすれば千円余りの負担だと思えばナントカナルという気になつてしまうからだ。洗濯機の月賦がまだ残っているというのに、テレビを買う気になったのは、長男が夕方になると隣の家のテレビを見たがって落ち着かなくなるのを見るに見かねての“清水の舞台”だったが、昭和三十一年にテレビを買うというのは世間一般と較べてたしかに早い方で、私はそのせいで深夜の原稿書きが増える苦勞を背負い込みながらもその一方で、心中ひそかに(俺もよくやるではないか)と鼻うごめかしたものだ。

諸井薫「わが人生の『濃密期』」『昭和生活文化年代記3』(TOTO出版、1991年)

今、人々のあこがれの物といえば何だろうか。携帯電話だろうか、パソコンだろうか。携帯電話は83%の世帯に普及しており、パソコンも63%の世帯に普及している¹⁵⁾。すでに

多くの世帯が所有しており、人々が欲しがっている物という印象は薄い。この2つに限らず、最近では人々が熱狂的に求める物があまりないように思われる。しかし今では珍しくも何ともないテレビは、ほんの50年前、人々が我も我もと欲しがったあこがれの物だった。

放送開始時(1953年2月)、受信契約件数は866件だったが10年後の1962年度末では13,378,973件にまで増加し、世帯普及率では65%(対国勢調査世帯数)にまで達していた¹⁶⁾。1953年当時のテレビの値段は14インチ型が17万5,000円~18万円で、平均的なサラリーマンの手取りが月に1万5,000円~1万6,000円だったことを考えると、その1年分に相当した¹⁷⁾。庶民には高嶺の花のはずのテレビが、なぜこんなに急激に普及したのだろうか。

1. 普及すべくして普及したテレビ

(1) 経済成長とテレビ普及

テレビが放送を開始した1953年は、ちょうど日本経済が戦前のレベルに回復したといわれた年であり、またテレビが急激な普及段階にはいった1960年代ごろは特に経済の伸びが著しい時期であった。いわゆる高度経済成長である。しかも、戦後における所得水準の上昇は、高所得者層にも中低所得者層にも、都市にも農村にも、例外なく生じたのがその特色である。さらに、産業構造の工業化にともなう大量生産体制の確立、流通革命、広告・宣伝活動の激化などから、テレビの価格は急速に低下した¹⁸⁾。

当初、高嶺の花だったテレビは1958年には14インチ型で6万~6万9,000円と約1/3にまで低下し、さらに1962年には4万5,000円

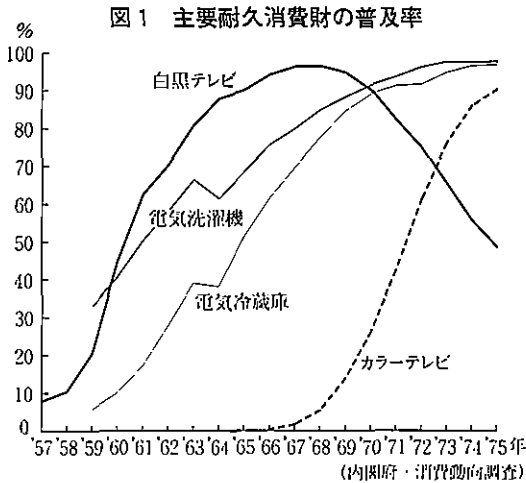
~6万円という程度にまで下落した。この間、国民一人当たりの年間所得は1953年に比べ1962年には約3倍になっていた。また月賦でテレビが購入できるようになったこともテレビ普及の追い風となった¹⁹⁾。そしてこの価格の低下が、消費者の購買意欲をさらに高め、その需要をより拡大することとなった。それと同時に、人々がテレビを買いたい、つまり、テレビで見たいと思うような大イベント(1959年皇太子ご結婚、1964年東京オリンピックなど)があり、人々の購買意欲にはずみをつけた。

また産業構造の変化と同時に、急激な都市への人口流入がおきた。都市化は多くの日本人を都市中間層に変えたが、その結果生じた住宅難は大型団地の建設を促した。日本住宅公団が設立されたのは1955年で、当初は年間1万戸程度であったが、その後年間約2万戸を建設している。団地の多い大都市近郊、埼玉県や神奈川県、大阪府で、テレビ普及率が最も高いという現象がみられた²⁰⁾。団地を見回せばテレビのアンテナはよく目に付くので、どこの家にテレビがあるのかわからないのかは一目瞭然であった。団地の特徴として、入居している家庭の年収や生活水準はほぼ同じであり、よその家庭に遅れまいとテレビを購入しただろうことは想像に難くない。

テレビの登場が高度経済成長のはじまりのころだったということが、テレビの急激な普及の社会・経済的要因といえよう。

(2) 求められた「家族の中心」

テレビに限らず、1960年代は電化製品が家庭に急速に浸透した時代である。「3種の神器」といわれたテレビ、電気洗濯機、電気冷



冷蔵庫が続々と購入され(図1)、「テレビに出会ったところがちょうど所帯を持ったところで、次々とする電化製品を買うことが生活の目的だったように思う」(女性70歳以上)というエピソードもある²¹⁾。発売時期は洗濯機のほうが早かったにもかかわらず、テレビのほうが早く広く普及した背景の1つには、他の耐久消費財と違い「テレビの楽しさを家族全員が享受できること」(藤竹1984)があげられる²²⁾。

さらにもう1つ、家族みんなで1台のテレビを見ることにより家族の一体感を味わうことができたこともあげられる。人々が熱心にテレビを求めた理由として、小川(1983)は「テレビを所有することによって、その当時新しく成立した多くの家族では、イエの『中心』を手に入れることになった」と指摘している²³⁾。これは、前述の団地、つまり、地方から都会に出てきた新しい家族でテレビの普及が著しかったこととも符合する。団地に住んだ新しい家族とは、これまで住んでいた家郷を離れてきた人たちである。高橋(1981)は「家郷とは、第1に、生活の拠点」であり「第2に、心の拠点」であり、「人間が生きて

いこうとするかぎり、生活の拠点や心の拠点は、いつの時代においても必要だとすれば、家郷は新しくつくらなければならないであろう」と述べている²⁴⁾。また見田(1971)も、「ホーム・メイキングとか、ホーム・ビルというような一見怪やかな週刊誌風の標語のかげには、意識の有無にかかわらず、家郷喪失者の群れの、家郷創造の重い悲願がこめられているのではなからうか」「『安心立命』の地としての『家郷』は今や、そこから出でてそこに還るべき所与としてでなく、自らここに建設すべき課題として現われはじめる」と、都市生活者における新しい家郷の創造を論じている²⁵⁾。

すなわち、各家庭でテレビを購入し、家族みんなでそれを見ることによって、テレビを中心に家族が1つにまとまり、その結果、「マイホーム」を新しい家郷に仕立てることができたのではないだろうか。テレビは家族の求心力を高めるための^{かつこう}恰好のものであった。

以上のように、高度経済成長とテレビの登場が合致し、都市化によって発生した家郷を失った新しい家族に、テレビが「マイホーム」という新たな家郷をもたらすことになったのである。

2. テレビが教えてくれた戦後日本の理想の家庭像・家族像

(1) ホームドラマの黄金期

大衆消費時代とはいえ、テレビ放送が面白くなければ人々がテレビを欲しがるわけがない。当時の人々にとってテレビは、これまではわざわざ出かけて行かなければ見られない芝居や寄席などの^{みせもの}見世物が、家庭に居ながら

にして見る事ができる新しい娯楽だったのである。このことを加藤(1958)は、娯楽が「日常的行為の一領域になった」と評している²⁶⁾。家庭という日常生活の中でテレビが見られるということが、テレビ娯楽の大きな特徴である。この特徴を上手く吸収したジャンルが「ホームドラマ」である。家庭で見られるドラマにふさわしく、ドラマの題材は家庭の中の出来事であり、「『家族』の一員としての個人の関心に合うように」つくられていた(加藤1958)。また、そこでは「見物人が(家族という 筆者注)組織的小集団であるのと同時に、演技者もそれに似た小集団を形成し」、「見物人が『家族的な環境』にある以上、演技者もその環境にマッチした演技」を展開したのである(加藤1958)。

ではそのホームドラマとは、どんなドラマだったのだろうか。簡単に振り返ってみたい。

テレビ放送開始当時に人気を集めたホームドラマといえば、アメリカ製ホームドラマである。あわてものの若夫婦とその隣人たちが繰り広げるコメディ『アイ・ラブ・ルーシー』(1957～1960年NHK)や、アメリカの中流家庭の様子を描いた『パパは何でも知っている』(1958～1964年日本テレビ)などである²⁷⁾。優しい両親と子どもたちという民主的な核家族が描かれており、岩男(2000)はこのようなアメリカ製ホームドラマが「便利な電化製品に囲まれた、明るく健康的なアメリカの家庭生活へのあこがれをかきたてた」としている²⁸⁾。地方で育ったある男性は次のように当時を思い出している²⁹⁾。

「毎日夕方テレビのある家の庭先からその家の長老が見ている番組を見ていた。子どもが集まってくると長老は、子どもたちの楽し

めるアメリカ番組に変えてくれた。このころから山の中でアメリカの生活に夢を持っていました」(男性50代)

そして、日本でもテレビドラマが制作できるようになると、『バス通り裏』(1958～1963年NHK)、『ママちょっと来て』(1959～1963年日本テレビ)、『咲子さんちょっと』(1961～1963年TBS)などが人気を集めた。いずれのドラマも平凡な家庭の日常生活をほのぼのと描いたものであった。さらに、1960年代前半には、大家族を描いたホームドラマがヒットした。『七人の孫』(1964～1966年TBS)、『ただいま11人』(1964～1967年TBS)などで、家族のもめごとを祖父や父親が丸く収めるといったパターンであった。つづく1960年代後半から1970年代前半にかけて、ホームドラマは全盛期を迎えた(表3)。この時期のホームドラマは、『肝っ玉かあさん』(1968～1972年TBS)や『ありがとう』(1970～1975年TBS)にみられるように、夫や父など家族の誰かがいない「欠損家族」であるが、それにも負けずに健気にたくましく生きる母と子の姿を描いていた。特に1972年の『ありがとう』では番組最高視聴率が56.3%(ビデオリサーチ関東地区 世帯視聴率)に達し、「お化け番組」と呼ばれていた。

この他、『時間ですよ』(1970～1973年TBS)、『寺内貫太郎一家』(1974～1975年TBS)など、核家族化が進んでいた実態とは裏腹に、テレビの中では大家族がみんなそろって食卓を囲む様子が描かれていた。

以上のように、1950年代から1970年代前半までのホームドラマは、戦後日本の理想の家族像・家庭像を人々に具体的に見せてくれた。最初はアメリカの民主的でさまざまな電

表3 夜間レギュラー娯楽番組の年間高視聴率上位10番組（番組最高世帯視聴率）

1972年					1973年				
番組名	放送局	曜日	時刻	視聴率	番組名	放送局	曜日	時刻	視聴率
ありがとう	TBS	木	20:00	56.3 %	ありがとう	TBS	木	20:00	55.2 %
8時だヨ！全員集合	TBS	土	20:00	45.7	8時だヨ！全員集合	TBS	土	20:00	50.5
時間ですよ	TBS	水	21:30	36.2	ゆびきり	TBS	木	20:00	49.8
スターものまね大合戦	NET	日	19:30	34.1	水戸黄門	TBS	月	20:00	35.4
サザエさん	フジ	日	18:30	33.1	時間ですよ	TBS	水	21:30	33.4
肝っ玉かあさん	TBS	木	20:00	33.0	サザエさん	フジ	日	18:30	32.8
木枯らし紋次郎	フジ	土	22:30	32.5	スターものまね大合戦	NET	日	19:30	32.4
大岡越前	TBS	月	20:00	30.6	特ダネ登場!?	日本テレビ	水	21:00	31.9
仮面ライダー	NET	土	19:30	30.1	マジンガーZ	フジ	日	19:00	29.9
帰ってきたウルトラマン	TBS	金	19:00	29.5	団盗り物語	NHK	日	20:00	29.9

=ホームドラマ

ビデオリサーチ社関東地区・18時以降に放送された15分以上のレギュラー番組（映画劇場、ワイドスペシャル、スポーツ番組は除く）
同一局の同一番組名のものが2番組以上ある場合は、高い方の視聴率を採用した。

（「視聴率20年」ビデオリサーチ、1982年）

化製品に囲まれた幸せな核家族の姿であり、次は日本の家庭を舞台とした、家族みんなが助け合って家族の力で困難を乗り越えていくという姿である。1970年代前半までのホームドラマは、家族のすばらしさを前向きに素直に語りかけ、そして人々もそれを喜んで受け止めていたといえるだろう。

(2) 民主主義を体感できたクイズ番組

ホームドラマと並んで、もう1つ、家庭で人気の番組ジャンルがあった。それはクイズ番組である。クイズ番組はラジオ時代から人気があったが、テレビでもそれが引き継がれた。代表的な番組は、『シャープさん、フラットさん』（1962～1970年NHK）、『アップダウンクイズ』（1963～1985年TBS）、『クイズタイムショック』（1969～1986年テレビ朝日）などである。

クイズ番組の質問は、万人が楽しめるように特別な知識や教養を必要とするものではなかった。また、クイズ番組を見ているときは、父親も母親も子どもも、テレビの前では等しく回答者になれた。クイズは子どもから大人

まで一緒に楽しめ、家族で見るとは都合のよい番組であった。村瀬（2003）は、「クイズ番組は『家族平等』に『問い』に参加できるという点で、『民主主義的』な家族イメージと適合しており、さらに他の番組と比べて内容や形式が『安全無害』な点が、『一家団らん』の場にふさわしいと評価されてきた」としている³⁰⁾。また滝沢（1966）は、戦後のクイズ番組の登場が「いわゆる“大衆参加”の形式を定着させ」、しかも「平等な立場による水平コミュニケーション」を実現させるものだったと指摘している³¹⁾。

家族の誰でもが参加できるというクイズ番組の平等性は、人々に戦後民主主義を家庭で実感させたものの一つといえるかもしれない。

3. “テレビ的”一家団らんの形成

(1) 食事と合体したテレビ

テレビが急速な勢いで普及し、また人々が夢中になって見たことで、ラジオとテレビはすっかり入れかわってしまった。ラジオを聴く人が目に見えて減少したのは1961年あたり

からである。

ラジオ聴取時間とテレビ視聴時間をグラフにすると、1960年と1965年ではラジオとテレビが入れかわってしまった(図2)³²⁾。たった5年でテレビがラジオに置き換わった要因として、放送内容やマスメディアとしての機能が類似していたことがあげられる³³⁾。さらに、音声に映像が加わったテレビはラジオに比べ、「おもしろさ」や「わかりやすさ」が秀でていたことなどが関係あるだろう³⁴⁾。

さらに、テレビが普及し、テレビ放送の時間も朝から夜までに拡大されると、テレビを見る時刻は1日のうち、朝・昼・夜の3つの山を形成するようになる³⁵⁾。普及途中の1960年では、夕食の時刻の山(18時台)とテレビ視聴の時刻の山(20時台)はずれており、夕食後にテレビを楽しむというパターンだと思われる(図3)。それが1965年になると、テレ

ビ視聴の山の中に食事の山が含まれてしまい、食事とテレビが同じ時刻になされるようになった。全員ではないにしろ、食事をしたな

図2 テレビ視聴時間とラジオ聴取時間の入れかわり

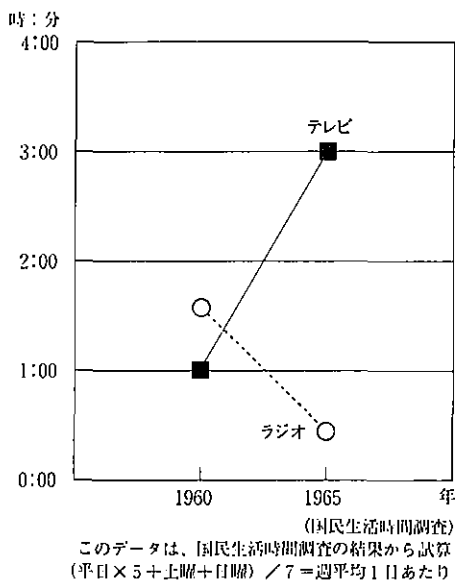
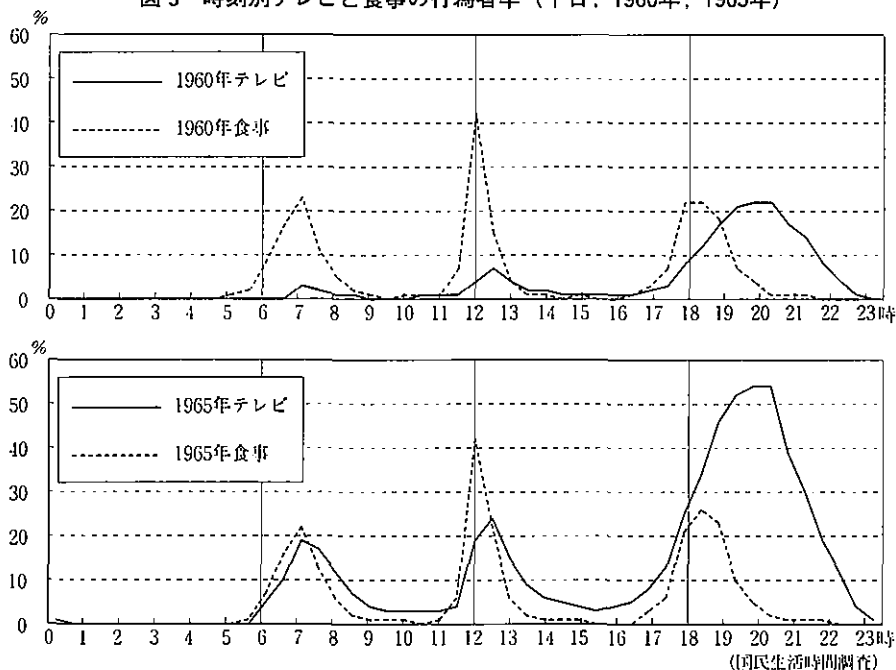


図3 時刻別テレビと食事の行為者率(平日、1960年、1965年)



からテレビを見る、または、テレビを見ながら食事をするというスタイルが生まれたといえるだろう。そして、夕食後にはさらに多くの人がテレビを見ており、「夕食後のひとときにテレビ視聴」という生活が定着したと考えられる。

「はじめに」で述べたように、食事時の会話は戦後になってから交わされるようになったものである。そして会話のある食卓の象徴が団地のダイニング・テーブルである。団地に住む都市の中間層はその多くが勤め人と専業主婦とその子どもの核家族で、おもに家族がそろうのは夕食時だけである。このような時間的な制約も加わり、勤め人の父親の帰宅後、家族がそろって夕食のテーブルを囲み、食事をしながら会話し、テレビを見ながら会話するという、「食事と会話とテレビ」が三位一体となった“テレビ的”一家団らんが誕生したのである。

そもそも「団らん」とは、「月などのまるいこと、またはまるいもの」を指し、「団らんする」という動詞は、「集まって車座にすわることや、家族など親しい者同士が集まって楽しく語りあったりして時を過ごすこと」である³⁶⁾。そして「一家団らん」とは、「家族全員が集まって、むつまじく楽しむこと」で、家族そろって楽しむ様子が強調されている。食事やテレビをきっかけとした一家団らんが人々に印象づけられたといってもよいだろう。

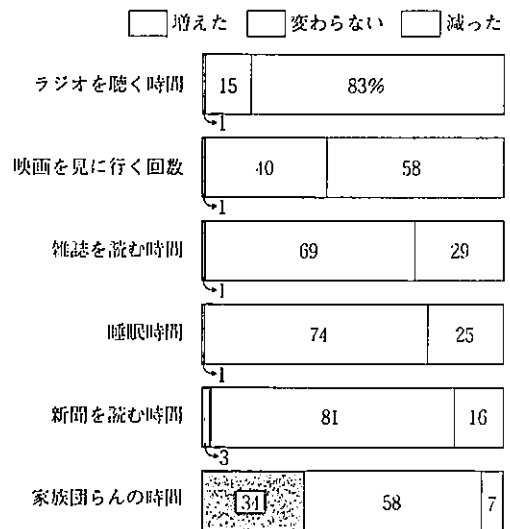
(2) 一家団らんに役に立つテレビ

テレビが一家団らんを押し進めたことを示しているのが図4である。テレビを設置することによって最も大きく影響を受けたのはラジオ聴取時間で、1957年の調査によれば、

83%の人が「ラジオを聴く時間」が減少したと答えており、ついで減少したのは「映画を見に行く回数」で、「新聞を読む時間」は最も影響が少ない³⁷⁾。反対に増えたという回答が目立つのが「家族団らんの時間」で、34%の人がテレビを設置したことで家族で団らんする時間が増えたとしている。当時テレビを見ていた人は、「夕食が終わるとそれぞれ自分の部屋へ入ってしまうような家庭だったので、テレビを購入したとき、これで一家で同じ部屋でテレビを見られるという家族団らんの印象が強烈であった」(男性60代)、「家族全員がテレビの前に集まり、同じ番組を見ることによって話題が一緒になり、大人になったようでうれしかった」(女性50代)と振り返っている³⁸⁾。

さらに、1969年の調査結果では、テレビが「家庭の団らんの中身を味気ないものにした」は6%、反対に「家庭の団らんの中身を充実させた」は33%と、人々はテレビを肯定的に

図4 テレビ設置による生活の変化感



(1957年テレビ意向調査)



家族をつなぎとめるテレビ 第2期：1975～1984年

評価している³⁹⁾。また同じ調査で、テレビが「家庭の団らん役に立っている」と答えた人は48%であったが、6年後の1975年の調査結果では59%と半数を超えていた⁴⁰⁾。

その一方で、番組の好みの違いによるチャンネル争いはテレビ初期のころから家庭に存在していた。小学校5、6年生を対象にした調査によれば、見たいテレビ番組について家族の間で意見の相違があるかどうか尋ねたところ、「よくある」9%、「ときどきある」30%、「たまにある」38%、「ほとんどない」16%、「ぜんぜんない」3%となった⁴¹⁾。「たまにある」まで含めると77%の子どもが見たい番組についての相違、つまりチャンネルをめぐる対立があったとしている。また、誰の意見と合わないかといえば、「きょうだい」か「父親」となっている。

テレビが一家に1台のときは、多くの家庭でテレビは茶の間などの家族が共用する部屋に置かれていた。そしてテレビを見ようと思えば家族と一緒に同じ番組を見ることになった。そこでは、ある時はチャンネル争いという家族メンバー間の緊張があり、またある時は意気投合して楽しむという弛緩があり、家族の間での否応なしの交流があった。家族が一緒にテレビを見ることで、良くも悪くも家族で団らんする機会が作り出され、そしてクイズ番組やホームドラマなど、一家団らんの時間を盛り上げる番組をテレビは提供したのである。

1970年代半ばまでテレビ視聴時間は右肩上がりで伸び続け、今から言えばこの時代が家族とテレビの黄金時代だったのである。

実は今まで、家族たちの見せかけの団欒は涿子のおしゃべりによって成立していたのではなかったのだ。七瀬は、やっとそのことに気がついた。一種のバック・グランド・ミュージックとして流れるテレビの雑音によって、あやうく支えられていたのである。テレビが消されると、家族の上に息苦しい沈黙が襲い、もう、寝る以外にはない。何も無い。筒井康隆『家族八景』（新潮社、1975年）

テレビ放送が始まってから1970年代の半ばまで、テレビ視聴時間は増加の一途をたどっていた。その当時の、テレビを欲しテレビに熱中していた家族の様子をⅠ章で述べてきた。ところが、1975年前後をピークにテレビ視聴時間は減少に転じ、その後10年ほど減り続けることになった(図5)⁴²⁾。このⅡ章では、テレビ視聴時間の減少期に、家族とテレビの間に何が生じていたのかをみていくこととする。

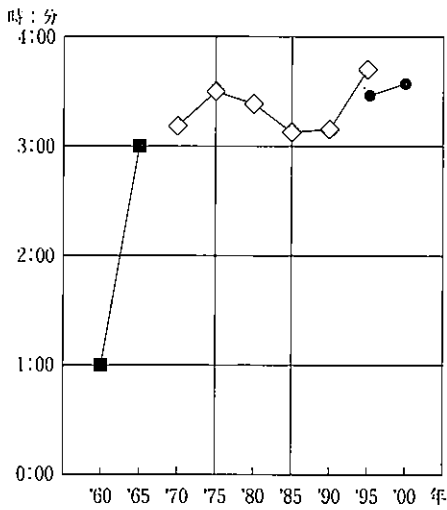
1. テレビの魅力にかげり

テレビ視聴時間が減少しはじめる前に、実は1960年代半ばから1970年代半ばにかけて、人々のテレビへの興味が薄れはじめていた。テレビに対して「以前も今も同じように興味がある」または「以前より興味がひかれることが多くなった」という人は、1960年代半ばでは72%に達していたが1970年代半ばになると58%にまで減ってしまった(図6)⁴³⁾。反対に、「以前より興味がひかれることが少なくなった」または「以前も今もあまり興味が

ない」という人は、19%から37%へと増えている。その一方で、同時期のテレビ視聴時間は増加しており、興味のある人が減っているのにテレビ視聴時間そのものは増えているという一見矛盾するような動きがみられた。

これは、人々のテレビへの熱狂ぶりが落ち

図5 テレビ視聴時間の推移（週平均）



このデータは、国民生活時間調査の結果から試算した。
 (平日×5＋土曜＋日曜)÷7＝週平均1日あたり
 なお、1960～1965年、1970～1995年、1995～2000年では
 調査方法が異なるため、グラフの線はつないでいない。

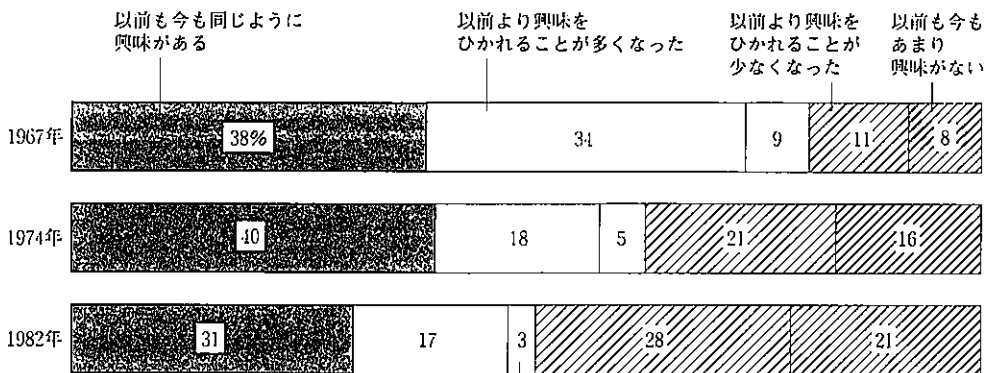
着き、テレビが日々の生活の中に溶け込んでしまったことを意味している。テレビ放送が開始されて20年近くたつと、人々にとってテレビは特別な存在から日常生活に定着した当たり前の存在となったのである。

さらに、第2期にあたる1970年代半ばから1980年代半ばにかけては、テレビに対する興味もテレビ視聴時間も減少した。テレビに対する興味が「ある」または「以前より多くなった」という人は58%から48%へとさらに減り、反対に興味が「少なくなった」または「ない」という人は37%から49%へと増えた。興味だけでなく、テレビ視聴時間そのものも減り、テレビ放送が始まったころの「当時はテレビは貴重品で、客間の床の間の前に置いてみんなで見ていた」(女性60代)¹⁴⁾というような熱い気持は失われつつあった。

テレビに対する興味が低下する一方で、第2期では人々のレジャーへの関心が高まっていった。

今後の生活の中で人々が力を入れたいと思う点は、「食生活」「住生活」が徐々に減少し

図6 テレビへの興味



わからない、無回答
 (1967年全国テレビラジオ番組意向調査)
 (1974年今日のテレビ調査)
 (1982年テレビ30年調査)

「レジャー・余暇生活」が増加している(図7)。人々は生活に余暇やレジャーという付加価値を求めようになってきた。実際に人々がレジャー活動にあてた時間は、1980年から1985年にかけて急増している(図8)⁴⁵⁾。平日、土曜、日曜のいずれでもレジャー活動時間は伸び、中でも「行楽・散策」や「スポーツ」、「見物・鑑賞」をしている人が増え、おもに戸外で行われるレジャーが浸透していった。とりわけ週末、女性で、レジャー活動時間が長くなる一方で在宅時間が短くなるという変化があり、女性が家の中にずっといるだけでなく積極的に外に出かけるようになった。第2期は、人々の関心の方向や自由時間の過ごし方が、テレビを見ること以外にも広がっていった時期といえよう。

特に1980年から1985年にかけては、仕事や家事、学業などの拘束時間と、食事や睡眠などの生命維持に必要な必需時間に増減がなかったため、自分の裁量で使える自由時間にも変化がなかった。この限られた自由時間の中でレジャー活動時間が増加したことにより、テレビ視聴時間が減少することとなった。

テレビが日常生活に定着したことで、テレビは人々にとって特別なものではなくなり、娯楽としてのテレビ視聴は当たり前すぎる存在となってしまったといえるだろう。

2. 家族を分散させるテレビ

日常にすっかり溶け込んでしまったテレビは、この時期、家族に対して相反する2つの役割を果たしていた。1つは「家族を分散させるテレビ」であり、もう1つは「家族の空白をうめるテレビ」である。まず、「家族を分散させるテレビ」についてたどっていこう。

図7 今後の生活の力点(複数回答)

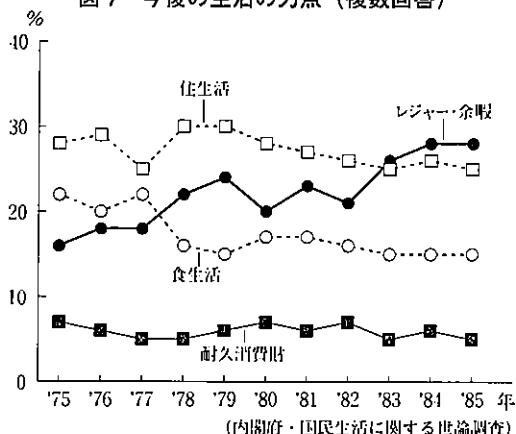
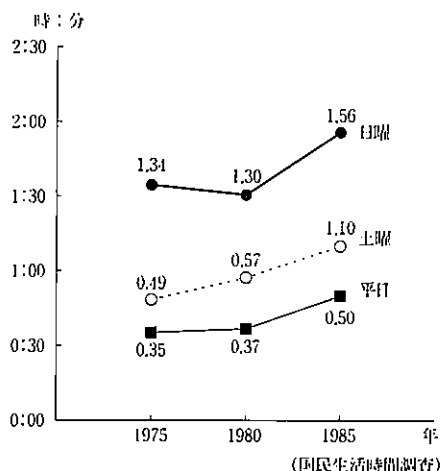


図8 レジャー活動時間の推移



【レジャー活動の具体的内容】

- 「行楽・散策」……観光地・遊園地・動物園に行く、ドライブ、散歩、ハイキング、釣り、繁華街へ行く、街をぶらぶら歩く、ウィンドウショッピングなど
- 「スポーツ」……テニス、野球、サッカー、ゴルフ、体操など
スポーツ全般、大学生の運動系サークル活動
- 「趣味・けいこごと」……趣味のこと全般、けいこ事、習い事、生涯学習など
- 「勝負ごと」……勝ち負けを楽しむスポーツ以外のゲームや賭け事で、囲碁・将棋、トランプ・ゲーム、競馬・パチンコなど
- 「見物・鑑賞」……祭り見物、競技場でのスポーツ観戦、音楽・絵画・舞台の鑑賞など

(1) 個別視聴の兆し

1975～1985年ごろはテレビ視聴時間が減少し、テレビに対する人々の関心が薄れた時期であるが、また同時に、テレビの見方が第1

期のころとは変わりはじめた時期でもある。

これまでテレビは家族と一緒に見るものであった。1970年では「一人だけで見るほう」という人は21%で、「ほかの人といっしょに見るほう」という人は70%にのぼっている(図9)⁴⁶⁾。1970年の白黒テレビの世帯普及率が90%だということを考えれば、「ほかの人」とはほぼ家族だと考えてよいだろう。ところが、その後「一人だけで」は増え続け、「ほかの人といっしょに」は減り続けた⁴⁷⁾。

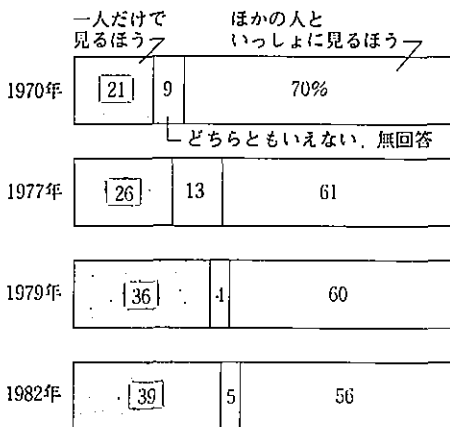
「一人だけで」が増えた背景には、もともと自分の好みの番組を見たいという気持ちもっていたことがあげられる。見たい番組は親子やきょうだいで異なっており、できれば自分の見たい番組を見たいが、家庭にテレビが1台しかないため、家族の見る番組と一緒に見ていたというのが実態であろう。テレビが1台であったがゆえに、チャンネル争いのようなこともおきたのである。1977年当時、「見たい番組が見られないことがある」という人

は71%にのぼり、見られない理由も「仕事や家事・勉強などで、時間の都合がつかないから」と「家族やまわりの人と見たい番組がかち合うから」に二分されている⁴⁸⁾。

このような潜在的なニーズがあるところに、2台以上のテレビを所有する世帯が少しずつ増え、一人で見られるという物理的な環境が整ってきたのである。複数のテレビを所有する世帯は1979年に半数(52%)を超えている⁴⁹⁾。自分の見たい番組が見たいという欲求があるところに、テレビが2台あれば一人で見ることも増えてもおかしくはない⁵⁰⁾。

東京30キロ圏で夫婦2人以上の世帯のうち、テレビを2台以上もっている世帯では、2台目以降のテレビ(サブテレビ)は大人の部屋や子どもの部屋などの個室に置かれている(図10)⁵¹⁾。また、メインテレビでは19時からテレビがよく見られているが、サブテレビでは20時から比較的に見られている(図11)⁵²⁾。食事中や食後に家族がそろってテレビ視聴というスタイルだけでなく、自分の見たい番組が異なれば家族と離れてサブテレビで一人で見るという視聴スタイルが現われはじめたの

図9 個別視聴の推移



(1970年全国個人視聴率付帯意向調査)
 (1977年視聴動向に関する調査)
 (1979年日本人とテレビ調査)
 (1982年テレビ30年調査)

図10 サブテレビの置いてある部屋 (サブテレビ所有265世帯)

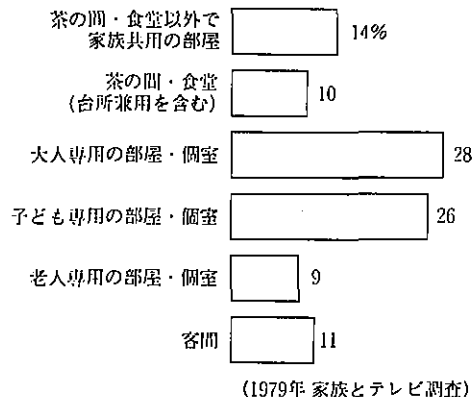
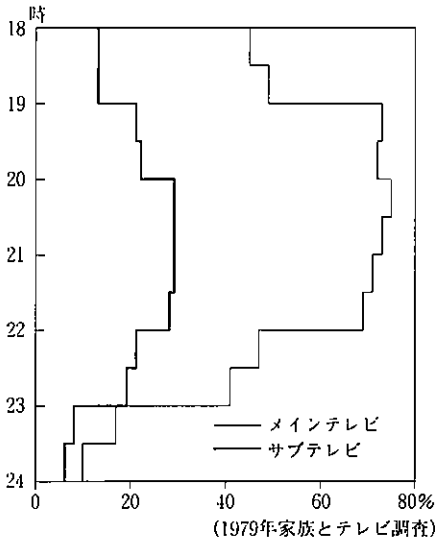


図 11 メインテレビとサブテレビの30分ごとの視聴率
(サブテレビ所有265世帯、地上波計、週平均)



である。

また、家庭内のふだんの過ごし方でも、家族一緒よりも自分一人で過ごしたいという気持をあらわす人が少なくなかった。1984年の調査では、「一人ひとりが自分の好きなことをして過ごすよりも、家庭の団らんを大切にしたい」という人は65%にのぼるものの、「家族の団らんだけではなく、一人ひとりの時間をもつことを大切にしたい」という人も33%いたのである⁵³⁾。特に16~19歳で「一人ひとりの時間」を大切にしたいという回答は47%と半数近くあり、若い人に家族と過ごすよりも自分の好きなことをしたいという気持がみられる。自分の見たい番組を見るために、茶の間から子どもたちが消えていったのである。

(2) 新しい価値観をもちこむテレビ

1960年代、家族の結束を高める役割を果たしていたテレビであったが、その家庭内での台数が増えることによって、今度は徐々に家

族を分散させはじめたのである。さらに、家庭に楽しいひとときをもたらしたテレビが、家庭に新たな価値観をもたらすことになった。それは「辛口ドラマ」に変わったホームドラマが家庭に投げかけた、これまでの家族のあり方や家庭のあり方、さらに家族一人一人の生き方に対する問題提起である。

テレビは家庭の中に居ながら社会のことを知る窓でもあるが、家庭外の価値観がもちこまれる窓でもある。この窓に映し出された「辛口ドラマ」のうち、エポックメイキングな番組は『岸辺のアルバム』(1977年TBS)である。ドラマでは、一見理想にみえる中流サラリーマン家庭が崩壊していく様子が描かれており、最終回で、ローンで建てたマイホームが堤防の決壊で濁流にのまれていくシーンは、戦後日本の高度成長を支えてきた核家族の崩壊を暗示していた。

そして、『金曜日の妻たちへ』(1983~1985年TBS)や『くれない族の反乱』(1984年TBS)では、家庭の主婦が自分の人生を振り返り、自分はこのままでいいのだろうかと思悩む、自ら行動をおこす姿を描いている。「私の人生ってなんだろう」「結婚ってこんなものだろうか」と、ドラマを見ている女性視聴者はゆさぶられたに違いない。『想い出づくり』(1981年TBS)のような、結婚適齢期を前に揺れ動く独身女性の気持を描いたドラマでも、「平凡な結婚を拒否する心理」が表現されていると三浦(1994)は分析している⁵⁴⁾。

また村松・牧田(1985)は1984年に放送されたドラマの内容を分析し、「(1980年代に入ると、多くのドラマは 筆者注) 視聴者と似通った現実味のある人物が、悩みをかかえて模索する過程を中心に描くようになった。そ

れも、とくに団塊の世代を中心とする女性が焦点で、彼女たちが自分を大切にする姿勢が強調されている」と述べている⁵⁵⁾。

この時期、良き母良き妻といった従来の女性像とは異なる、積極的で主体的に生きていく女性像がドラマの中で描かれるようになっていた。当時の社会状況は、国際婦人年(1975年)やウーマンリブなど女性の権利が言われはじめ、若者夫婦の間では夫と妻が対等で友達感覚の「ニューファミリー」が登場していた。このような現実がドラマに反映し、ドラマを見ることで我が身を振り返るきっかけになっていたと思われる。ドラマで描かれた女性主人公たちは一種のモデルであり、女性が自立する、女性が自らの意志で働くという考え方をドラマは家庭にもちこんだ。

これに呼応するかのように、専業主婦たちの間に就業意欲が芽生えていた。専業主婦のうち就業意欲のある人とない人はほぼ半々で、就業したい理由として「社会とのかかわりをもちたいから」が収入よりも重視されている⁵⁶⁾。有配偶者女性の就業者率(厚生労働省・労働力調査)も1975年が底になっており、その後じりじりと上昇している。また、「空の巣症候群」「思秋期」という言葉が流行したのもちょうどこのころで、子育ての終わった主婦たちは一種の焦燥感を感じていた。

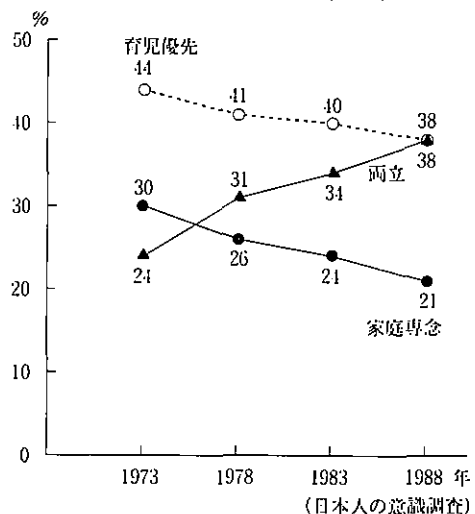
さらに、離婚件数も長い間連れ添った夫婦で急増していた。1975年と1985年の離婚件数を比較すると、婚姻期間15～20年の夫婦の離婚は2.6倍に、婚姻期間20年以上の夫婦の離婚は3倍に増えている⁵⁷⁾。その結果、1985年には15年以上連れ添った夫婦の離婚は、全離婚件数の25%にまで達していた。ドラマの女性主人公と同様に、中高年女性が母親や妻と

いった役割を離れ、自分自身の生き方、つまり私(個人)を意識しはじめていたのである。

家族についての調査結果でも、女性の生き方や家庭についての考え方が変質しはじめていることを示している。女性の結婚と仕事の関係について、女性自身は、「結婚したら、家庭を守ることに専念したほうがよい」という家庭専念の人や、「結婚して子どもができるまでは、職業をもっていたほうがよい」という育児優先の人は減少しつつあり、かわって「結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業をもち続けたほうがよい」という両立の人が増加しつつあった(図12)⁵⁸⁾。育児を優先する人が最も多いものの、第2期にあたる1978年から1983年には、結婚して家庭に入るほうがよいという意見よりも女性も仕事をもち続けたほうがよいという意見が上回っていた。

また、理想の家庭像についても、「父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された家庭をしっかり守っている」という性役割分担と「父親はなにかと家庭のことにも気をつかい、母

図12 女性の家庭と職業(女性)



親も暖かい家庭づくりに専念している」という家庭内協力が、女性で逆転したのもこの第2期である(図13)⁵⁹⁾。「男は仕事、女は家庭」という固定概念が女性で変わりはじめたころであり、女性も家の外に出るという意識が、Ⅲ章で述べるような家族の個人化と家族視聴の減少を呼び込む下地となっていった。

3. 家族の空白をうめるテレビ

家庭でテレビを複数台所有し個別視聴が可能となっても、また家族と一緒に過ごすよりも一人で自分の好きなことをしたいという気持があったとしても、主婦が家族のことだけでなく自分のことも考えはじめたとしても、家族でテレビを見なくなったわけではない。

(1) 家族で漠然と見るテレビ

家族みんなでテレビを見る時間と一人でテレビを見る時間を比べると、東京30キロ圏の核家族では、家族みんなで見る時間は31分であった⁶⁰⁾。一方、子どもだけでテレビを見る時間は41分、妻だけは30分、夫だけは25分であった。家族みんなで見る時間は、極端に多いわけでも少ないわけでもなく、ほどほどに存在していた。さらに、家族そろってテレビを見る時の気持を尋ねた質問でも、「家族がそろって見ると、どんな番組でもけっこう楽しめる」という人が39%で最も多い(図14)⁶¹⁾。その一方で、「別にどうとも感じない」という無感情の人や「見たくもない番組まで見る気がしない」「ほかの番組を見たいのに残念だ」という家族視聴を好まない人も少なくない。

それでは、家庭の中でどのような番組が家族で見られていたのだろうか。そのとき家族はみんなで熱心に番組を見ていたのだろうか。

図13 理想の家庭(女性)

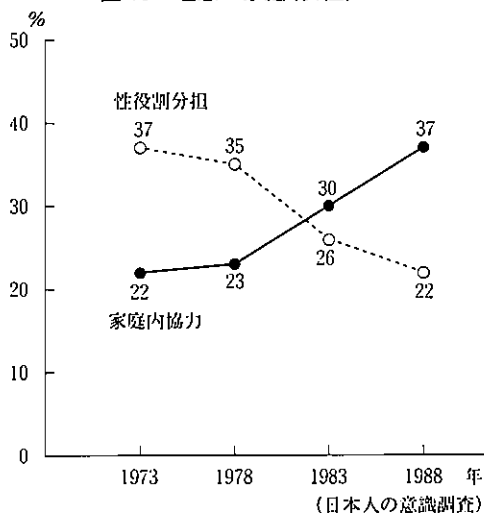
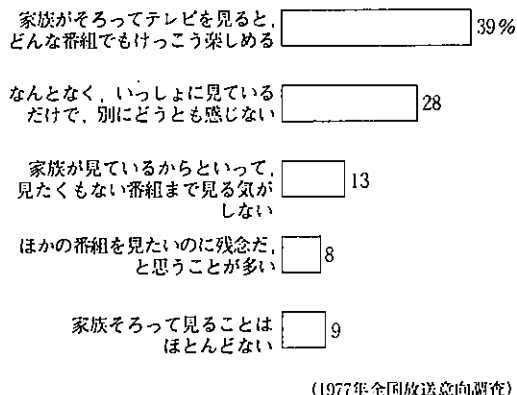


図14 家族そろってテレビを見るときの気持



か、それともイヤイヤ見ていたのだろうか。本田・牧田(1979)は、世帯内テレビ視聴の実態調査から家族視聴に以下の3つのパターンを見いだした⁶²⁾。

①家族全員が積極的に見る

『夜7時のニュース』『草燃える』
『クイズダービー』 など

②家族の誰かにつられるか、つきあうかして見る

『8時だヨ!全員集合』子どもにつきあう
『水戸黄門』夫につきあう など

③家族の全員がただなんとなく漠然と見る

『オールスター家族対抗歌合戦』
『欽ちゃんのドンとやってみよう』
『連想ゲーム』 など

①と②は、家族の中にその番組を見たい人がいるというごく当たり前の状態である。一方③は、とくに見たい人がいないのにテレビをつけているという状態である。見たい人がいないのに、とりあえずテレビをつけておく理由は、家族の会話がとぎれてもテレビが次の話題を提供してくれるからである。極端な話、家族の間で会話がなくとも、当たり障りのない番組をつけておけば、テレビが勝手に適当な話題を投げかけてくれるので、家族はそれを何となく見ていればよいのである。

さらに、このような状態が進むと、家族がお互いを見ずにテレビだけを見るようなこともおきてしまう。見田(1995)は「この時代の日本の家族は、一般にテレビジョンを見ながら食事をするから、実際の坐る位置はともかく、視線の方向も心の配置も、事実上並行的になっている」と指摘している⁶³⁾。テレビは家族で何となく時間を過ごせるようにしてくれる反面、家族と直接交わらなくて済むようにもしてくれた。

(2) テレビが支える一家団らん

会話の途絶えがちな家族にとって、テレビは救いの手を差し伸べてくれる救世主のような存在である。1979年の調査結果でも、「テレビのおかげで家族がなごやかに過ごせる」と感じている人は71%に達し、また「テレビはいわば家族の一員のようなものだ」と感じている人も64%にのぼる⁶⁴⁾。当時は、マスコミに家庭内暴力や「家族の断絶」などがとり

あげられ、家族の絆が危ぶまれていたころである。テレビは家族の間をとりもつ役割を果たすようになっていた。「家族と一緒に過ごすためにテレビを見る」という人も44%と⁶⁵⁾、テレビは家族関係を維持するための道具として認識されていた。

同様のことが、夜、家族そろって過ごすときにテレビが必要かどうかという回答からも読みとれる。子どもが就学前、小学生、または中高校生の核家族では、テレビが必要だという回答は、順に、34%、40%、46%であるが、子どもが成人した核家族では64%にもぼっている。また、一家団らん時の話題も、子どもがまだ小さいか学齢期だと「子どもの学校や勉強のこと」が多いが、子どもが成人していると「世の中のできごとや政治のこと」となり、一般的でこれといった特別な話題ではなく、家族と過ごすときにテレビの力を借りている様子が見え⁶⁶⁾。

「家族との面倒な対話を避けながらもなお家族と共に在りたいと願う人々にとって、テレビは面と向き合うことなく肩を並べあつての短い言葉のやりとりや笑うという行為のなかにお互いの存在を確認しあえる場を提供する」と、加藤(1972)はテレビのこのような作用を早くに見抜いていた⁶⁷⁾。

第1期では、家族でテレビを見ることは最大級の娯楽の1つで、“テレビ的”一家団らんが生まれ、「会話、食事、テレビ」の3点セットが人々の記憶に刷り込まれた。しかし第2期で、家族が分散し家族の間で会話が弾まなくなり3点セットから「会話」が抜けおちても、テレビが「会話」を担ってくれたことで、「食事、テレビ」の2つだけでも人々は一家団らんしているような気分を味わうこ

とができたといえよう。テレビがついていることで、人々は一家団らんしているような気になれたのである。

1975年から1985年にかけてのテレビと家族の関係を考えると、個別視聴を促進するような「家族を分散させる力」と、一家団らん気分を演出するような「家族の空白をうめる力」、この2つがせめぎ合っていた時期といえるだろう。このことは、同時期に「テレビは家族の会話を奪うのか、それとも促進するのか」という、テレビのアンビバレントな影響が問題視されていたことからわかる⁶⁸⁾。そして、この2つの力の駆け引きは、結局「家族を分散させる力」＝テレビ視聴の個別化が優勢となる。その様子についてⅢ章で述べることにする。



テレビは私のアンテナ

第3期：1985年～現在

一見孤独のように見えるが、現代の家族は決して昔の意味で孤独ではない。なぜならば、実はそれぞれのメンバーは、テレビにせよ、電話にせよ、ニューメディアにせよ、機械を通して外の世界とつながっているからである。外の世界と対話したり交信したり、さまざまなコミュニケーションを持っている。ウォークマンもステレオもそのひとつである。彼らはこうした機械と結合する世界の中で、ひとりで笑ったり、叫んだりして、決して孤独ではない。

小此木啓吾『家庭のない家族の時代』（ちくま文庫、1983年）

1985年から現在までの第3期は、自由時間の大幅な増加などを背景に、テレビ視聴時間が再び増えた時期である。また、家族という私的集団をさらに細分化する個的主張が強くなり、こうした傾向を反映した番組が増え、テレビの見方も個別視聴への傾斜が進行した時期でもある。

このⅢ章では、まず、ドラマの内容とテレビの見方がどのくらい個人化したのかを確認する。次に、一人でテレビを見ることで、一家団らんがどうなってしまったのかについて考察し、そして、テレビを一人で見るようになったことで、私たちとテレビの関係がどうなったのかについて考えてみたい。

1. ドラマも視聴も家族から個人へ

(1) 「ホーム・レス」なドラマ

1985年以降のドラマの特徴でまず指摘したいのは、家族の愛情や確執を描くことをテーマとせず、20代の主人公たちの恋愛や日常生活を描くことをテーマにしたものが増加したことである。いわゆる「トレンディ・ドラマ」の登場である。トレンディ・ドラマの原型は、TBSの『ふぞろいの林檎たち』（1983年）といわれているが、その形を明確にしたのはフジテレビの『君の瞳をタイホする！』（1988年）、『抱きしめたい！』（1988年）、『東京ラブストーリー』（1991年）などである。

時は折しもバブル景気で、都会的でファッションナブルな主人公たちの生活と、若い男女の恋愛模様が時には小気味よく時にはシリアスに描かれていた。また、女性の社会進出に伴い、女性主人公たちは専業主婦から会社に勤める独身OLやキャリアウーマンに変わり、

ドラマの舞台も家庭から職場へと移った。「辛口ドラマ」は中高年女性の新しい生き方を提示していたが、「トレンドィ・ドラマ」は若い女性の新しい恋愛や生き方を提示した。ドラマの中に家族が登場しても、家族とのやりとりはストーリーの中心ではなく、話の筋はあくまで、若い主人公たちの悩みや恋愛、自分の生き方である。ドラマの中で家族の影が薄い「ホーム・レス」なドラマだともいえよう。

さらに、この「トレンドィ・ドラマ」は、主人公たちと同年代の人たちは等身大のドラマとして楽しめるが、それ以外の人たちにとっては、主人公たちの悩みや生活が自分たちの悩みや生活と乖離していて、理解しにくいドラマとなってしまった。「トレンドィ・ドラマ」は特定の人たちに見てもらうことをねらった番組であり、家族で見ることを前提としないドラマである。このようにドラマの内容の変化も、家庭内の個別視聴を推し進めた要因の一つといえる。

(2) 家族視聴の減少、個別視聴の増加

ドラマの主流が「ホームドラマ」から「ホーム・レス」ドラマに変わったように、テレビの見方も「一人で見ることが多い」が増え、2002年の調査では「家族と見るが多い」とほぼ拮抗するまでになった(図15)⁶⁹⁾。さらに、テレビを一人で見たいのか、人と一緒に見たいのかという意欲について尋ねた結果でも、同様の傾向がみられる。テレビを「他の人といっしょに見たい」という人は1985年以降減少を続け、反対にテレビを「一人だけで見たい」という人は1985年と比べると増えている(図16)⁷⁰⁾。そして、2000年では

図15 個別視聴の推移

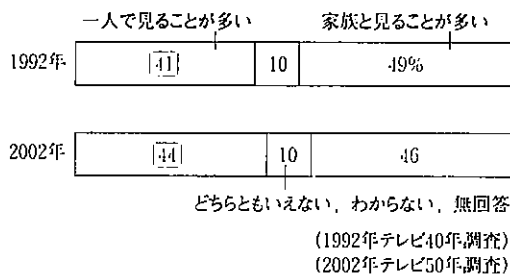
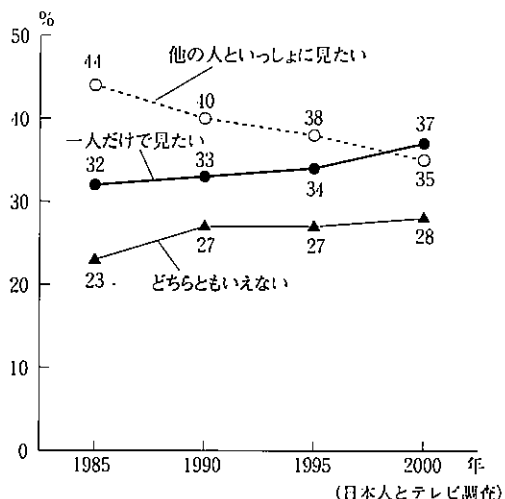


図16 一人だけで見たいか、他人といっしょに見たいか



この2つはほぼ並んでいる。行動の上でも意欲の上でも、一人でテレビを見るのが優勢になりそうである。

家族みんなでテレビを見る時間も、25年ほど前と比べると短くなっており、東京30キロ圏に住む核家族の結果では、夫・妻・子が一緒にテレビを見る時間は31分(1979年)から20分(2002年)になっている⁷¹⁾。それでも、核家族の中で小学生の子どもがいる核家族では、家族のメンバー(夫・妻・子)がよく見る番組は比較的一致する(表4)。時間はおもに日曜夜18:30~20:00で、番組は「サザエさん」(1969年~)「こちら葛飾区亀有公園前派出所」(1996年~)「ワンピース」(1999年~)(すべ

表4 小学生のいる核家族(夫・妻・子)の視聴率高位10番組(メインテレビ)

夫					92人
	局	曜日	時刻	番組名	%
▲	フジ	日	19:00	こちら葛飾区亀有公園前派出所	21
▲	フジ	日	19:30	ワンピース	19
▲	フジ	日	18:30	サザエさん	17
○	日本テレビ	月	20:00	世界まる見え!テレビ特捜部	16
▲	日本テレビ	月	19:30	名探偵コナン	14
	TBS	土	19:00	筋肉番付	14
	TBS	土	20:00	USO!?ジャパン	13
	テレビ朝日	火	21:51	ニュースステーション	13
○	フジ	月	21:00	人にやさしく	13
	NHK	日	20:00	利家とまつ	11

妻					92人
	局	曜日	時刻	番組名	%
▲	日本テレビ	月	19:30	名探偵コナン	36
	フジ	月	22:00	SMAP×SMAP	31
△	日本テレビ	月	19:00	犬夜叉	27
▲	フジ	日	19:00	こちら葛飾区亀有公園前派出所	23
○	日本テレビ	月	20:00	世界まる見え!テレビ特捜部	23
○	フジ	月	21:00	人にやさしく	23
	日本テレビ	火	19:00	伊東家の食卓	22
▲	フジ	日	19:30	ワンピース	20
△	TBS	火	20:00	学校へ行こう!	19
▲	フジ	日	18:30	サザエさん	19

子					182人
	局	曜日	時刻	番組名	%
▲	日本テレビ	月	19:30	名探偵コナン	43
△	日本テレビ	月	19:00	犬夜叉	41
▲	フジ	日	19:00	こちら葛飾区亀有公園前派出所	37
▲	フジ	日	18:30	サザエさん	36
	テレビ東京	水	19:00	テニスの王子様	35
	テレビ朝日	金	19:00	ドラえもん	35
▲	フジ	日	19:30	ワンピース	34
	テレビ朝日	金	19:30	クレヨンしんちゃん	34
	テレビ東京	水	19:27	ヒカルの碁	31
△	TBS	火	20:00	学校へ行こう!	29

▲=夫と妻と子で共通している番組

△=妻と子で共通している番組

○=夫と妻で共通している番組

・放送時間10分以上

・週に2日以上放送している番組については、視聴率が最も高い曜日

(2002年家族の中のテレビ調査)

てフジ)など、子どもに人気のアニメ番組である。しかし、子どもが中高校生になると、夫・妻・子でよく見る番組はなかなか一致しなくなる。高位10番組の中で3者で一致するのは「ザ!鉄腕!DASH」(1995年~日本テレビ)のみである。また、子どもが成人している核家族で一致する番組はNHK大河ドラマであった。子どもが中学生以上ともなると、家族で同じテレビ番組を見るのが少なくなる。

この背景には、家族人数の減少とテレビ所有台数の複数化が進んだことがあげられる。一世帯あたりの家族人数は、テレビ放送が始まったころの1955年では4.97人であったが、2000年では2.71人にまで減少している⁷²⁾。またテレビを2台以上所有している世帯は1985年では58%だが、2000年では71%にまで増え、さらに3台以上を所有する世帯は36%にのぼっている⁷³⁾。家族の人数が少なくなり、その一方でテレビの台数は増えたため、テレビが一人一台という家庭が出てきた。

テレビが複数台ある家庭でどのようにテレビが見られているかを、東京30キロ圏の世帯でみてみよう⁷⁴⁾。まず夜9時を過ぎると2台目以降のサブテレビが見られはじめ(図17)、さらに夜9時台はメインテレビとサブテレビの両方が同時に視聴されている。一方メインテレビは、メインテレビのみの世帯も含むが、夜9時台は一人で見る人と何人かで見える人が拮抗し、夜10時台になると一人で見る人が上回る(図18)。夜9時を境に、サブテレビはもちろんのことメインテレビを含め、家庭内での個別視聴の傾向が強まるようだ。

テレビの見方についての聞き取り調査⁷⁵⁾をしたところ、「食事中だけ家族と一緒にテレ

図17 メインテレビとサブテレビの30分ごとの視聴率
(サブテレビ所有522世帯, 地上波計, 週平均)

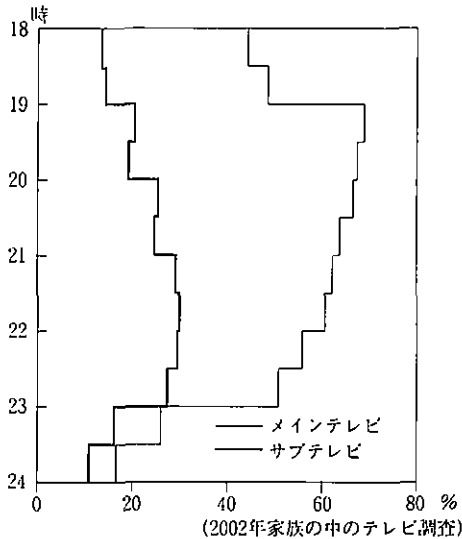
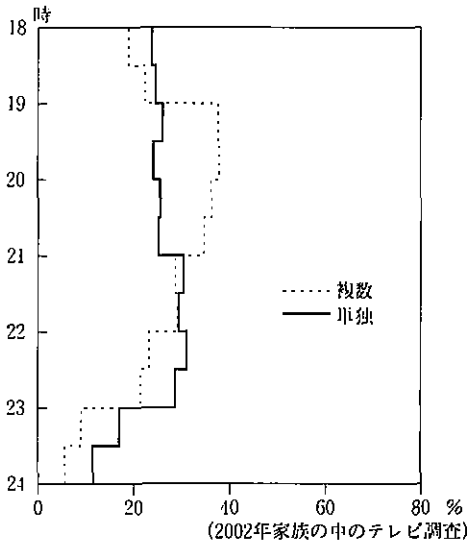


図18 単独視聴・複数視聴の30分ごとの視聴率
(世帯, 地上波計, 週平均, メインテレビ)



テレビを見る。きょうだいも食事中だけリビングのテレビを見る。食事以外の時間は自分の部屋にいて、部屋でテレビを見るときは一人で見る。両親はリビングのテレビを見ている」(女性30代)、「見たい番組が違うので、両親とは一緒に見ない。それぞれ好きな番組を自

分たちの部屋で見ている」(女性30代)というように、遅い夜ではメインテレビもサブテレビ化し、家族が各部屋のテレビの前に散らばり、それぞれが見たい番組を見ているという状態が出現してきたのである。

2. テレビと団らんする人々

(1) それぞれ好きなように過ごしたい家族

テレビの複数台所有だけでなく、そもそも家族メンバーの生活パターンそのものが一致しなくなったことも、テレビを一人で見るという個別視聴を押し進めたといえよう。この時期は生活の深夜化・24時間化、女性の社会進出などがあり、これらが家族メンバーの生活パターンにさまざまなバリエーションを生じさせ、家族をそろいにくくさせた。

例として、夕方から夜にかけての生活の様子を夕食の時刻に注目してみよう。夕食の時刻は、子ども(小学生高学年から中学生にあたる10~15歳)とその母親の年齢にあたる女性40代では、夜7時がピークで前後1時間の間に集中している(図19)⁷⁶⁾。一方、父親の年齢にあたる男性40代では、同じ夜7時にピークがあるものの、それより遅い夜8時から11時までの間に夕食をとる人がいる。父親とそれ以外の家族では、夕食の時刻が異なっていると推測できる。

家族全員で夕食をとる回数は、核家族の場合、「毎日」と「週に1~2日くらい」が目立つ(図20)⁷⁷⁾。毎日という人がいる一方で、週に1~2日くらい、おそらく週末くらいしか家族全員で夕飯の食卓を囲む機会がない家庭もある。また、子どもが家庭で一人で食事をする「孤食(個食)」という状況も、朝食だけ

図19 食事時刻のずれ(平日)

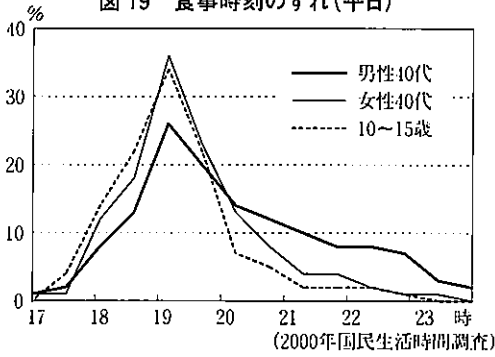
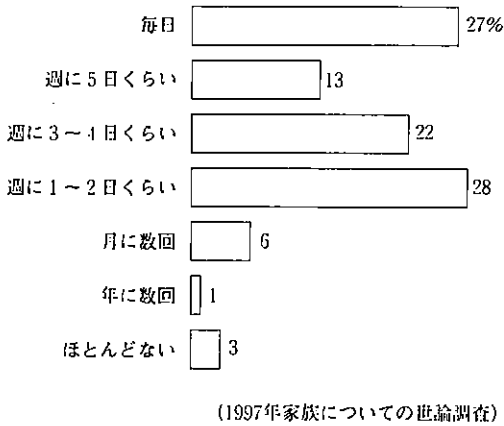


図20 家族そろっての夕食の頻度(核家族)

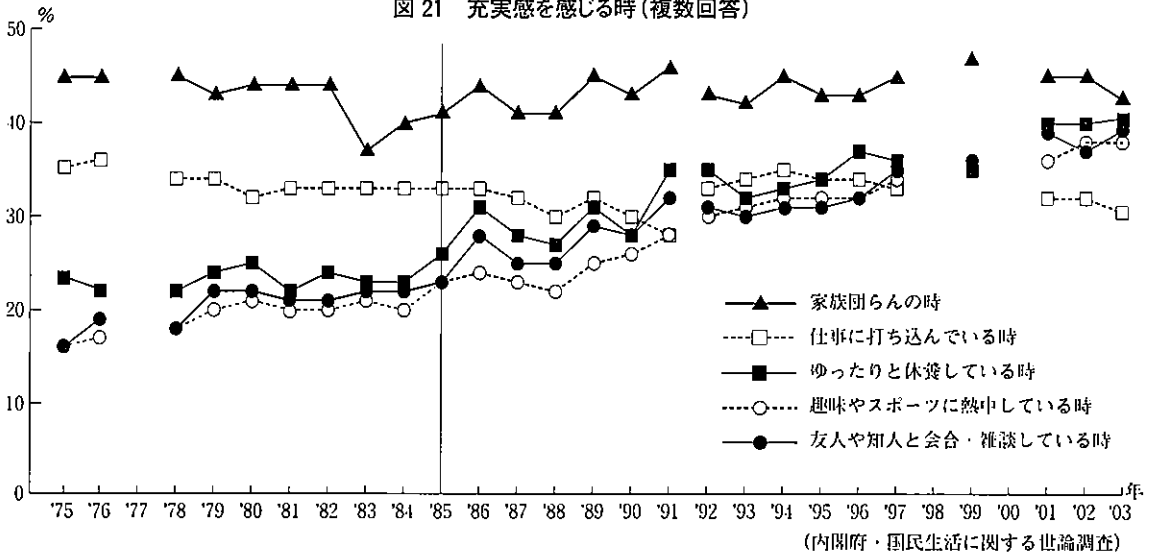


でなく夕食でも見受けられるようになっている⁷⁸⁾。家族一緒に食事をするのがなければ、食事をきっかけに家族が集まり、食事をしながらテレビを見たり、食後にテレビを見ながら団らんしたりということも少なくなる。

さらに、自由時間の過ごし方も家族と一緒に、というわけではない。ふだんの日に、自分の自由になる時間は「好きなことをして楽しむ」48%、「家族・友人とのふれあいを深める」15%と、家族・友人よりも自分の好きなことが上回っている⁷⁹⁾。また、充実感を感じる時に「休養」「趣味やスポーツ」「友人と雑談」と答える人が1985年以降増え続け、「家族団らん」に迫っている(図21)⁸⁰⁾。さらに、気持の上でも家族より個人が意識されており、妻たちの72%は「夫婦であっても自分は自分でありたい」と思っている⁸¹⁾。

大切だと思ふ家庭の役割として「家族のメンバーが休んだり、楽しんだりする場」が73%と多くの人に選ばれているが⁸²⁾、その場は小此木(1983)が「ホテル家族」と名付けた

図21 充実感を感じる時(複数回答)



ように、家族一緒にとよりも家族のメンバーそれぞれが自分のしたいことをして別々に過ごす場と化している⁸³⁾。前述のように、家族で一緒に食事をする機会が限られ、家庭では自分の好きなことをし、夜9時以降は個室にあるサブテレビを一人で見るといった状況が珍しくないのである。

(2) テレビの中に家族がいる

自分の個室でテレビを一人で見ると、一家団らの雰囲気を醸し出す「会話・食事・テレビ」のうち会話と食事が消え、舞台装置がテレビのみになってしまう。テレビを一人で見ると、「テレビを見ながら一家団らん」というスタイルが成立しなくなるが、それでは一家団らんはどうなったのだろうか。実は、一家団らんはテレビ番組の中に吸収されたのである。テレビを囲んで人々が集まって楽しむという形は、今やバラエティ番組やバラエティ化した各種の番組の中に取り込まれている。バラエティ番組に出演しているタレントたちは「VTR」という番組を見ながら、まるで家族のように感想を言いあったり笑ったりしているのである。そして人々は、タレントたちの団らんにテレビのこちら側から参加しているのである。

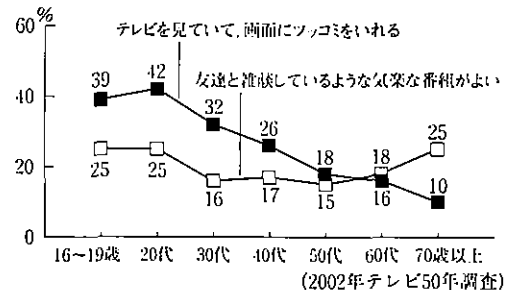
例えば、『学校へ行こう!』(1997年～TBS)の「未成年の主張」では、屋上から校庭に向かって声を張り上げる子どもたちの様子を、V6の森田剛たちが屋上の隅に置かれたモニター画面で見つめる、という構図になっている。子どもたちの主張に、タレントたちが大受けしたり笑ったりしている様子を人々が見て、一緒になって笑うのである。また「恋愛地球紀行あいのり」(1999年～フジ)では、素

人出演者の旅模様と恋愛模様を収録したVTRを、スタジオの久本雅美らとテレビのこちら側から一緒に見る。そして素人出演者の恋の行方をスタジオのタレントと一体となって見て、ハラハラドキドキする気持ちを共有するのである⁸⁴⁾。

このような状況を村瀬(2003)は「視聴者が『団らん』しているのは家族とはなく、番組となのである」と述べている⁸⁵⁾。調査結果でも、「テレビを見ていて、画面にツッコミをいれる」や「友達と雑談しているような気楽な番組がよい」が10代後半、20代で目立っている。そこには彼らがテレビとコミュニケーションをもち、雑談的雰囲気を好み、テレビと団らんしている様子があらわれている(図22)⁸⁶⁾。前出の聞き取り調査にも、「トーク番組を見ていて、一緒に会話をしている気分になる。『ハイ、ハイ、ハイ』『ある、ある』『それは違うだろ』という感じ」(女性30代)、「テレビに向かって、『これ違うでしょ!』と言ったりもする」(女性20代)という発言がある⁸⁷⁾。

村瀬はつづけて「テレビの前から家族が散っていくに従い、クイズ番組では、さかんに(出演者による疑似家族が 筆者注)演出されるようになっていった」と指摘している。例えば、『世界ふしぎ発見!』(1986年～TBS)

図22 テレビとコミュニケーションする見方(年層別)



では、回答者の板東英二は父親、黒柳徹子は母親、そして野々村真は出来の悪い息子という具合である。またクイズ番組だけではなく、バラエティ番組でも同じように番組の中に家族がいる。タイトルもずばり「伊東家の食卓」(1997年～日本テレビ)では、出演者は伊東四郎を父親とする家族の一員として位置づけられている。

人々はテレビを一人で見ている、あたかも家族と団らんしているかのように、テレビの中のタレントたちと団らんしているのである。

3. 私を包み込むテレビ

(1) 「つけたまま」で「何となく」見る

テレビと団らんしているということは、テレビがついていれば、たとえ一人で見ているも団らんの雰囲気を感じるといえることである。テレビをつけたままにしておけば、つねに自分の部屋の中に団らんの雰囲気を漂わせておくことができる。第2期で家族の間の空白をうめるためにつけられていたテレビは、第3期では一人でテレビを見ている自分の周囲の空間をうめるためにつけられる。

まず「家に帰ると、とりあえずテレビをつける」という人は20代で最も多い(図23)⁸⁸⁾。さらに、「見たい番組がなくても、テレビをつけたままにしておく」という人も20代を中心に若い人で多く、数は少ないながら「画面を見ないで音だけを聞いている」という人も20代が目立っている(図24)⁸⁹⁾。例えば、「朝起きたらまずテレビをつける。テレビはあって当たり前、ついていて当たり前」(男性30代)、「部屋のテレビは、見たい番組がなくて

図23 家に帰ると、とりあえずテレビをつける(年層別)

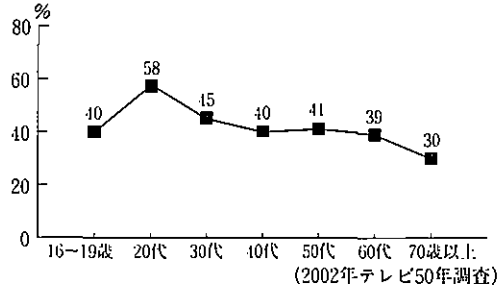
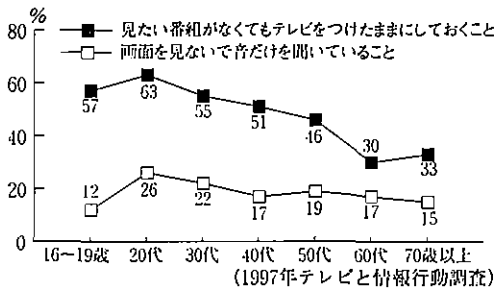


図24 つけたままの見方(年層別)(よく十とときどきある)

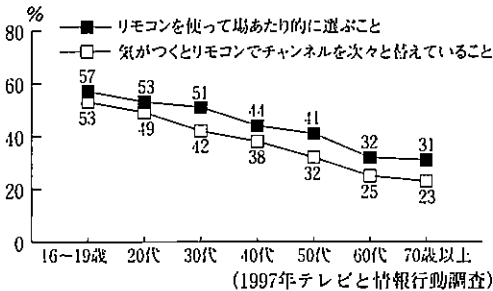


もベッドに入るまでつけっぱなしにしている」(女性30代)、「テレビがついていないと落ち着かないし、静かすぎる」(女性30代)⁹⁰⁾という感じである。友宗・原(2001)は「テレビがついていることで、その場が明るい雰囲気になる」ことから、今この時間を快適に過ごすためにテレビがつけられていることを見だし、このような視聴を「時間快適化視聴」と名付けている⁹¹⁾。

そして、その時間や空間を心地よくうめるためのテレビなら真剣に見る必要はない。「何曜日だから何を見るということではなく、その場で流れていけば見る。固定したものはない」(女性30代)⁹²⁾というように、「つけたら、たまたまやっていた番組を見ること」はどの年層でも半数を超えている⁹³⁾。または、流れる映像から自分の興味関心にあう箇所を拾いあげるように見ている。リモコンを使って、「場あたりに選ぶこと」や「気がつく

チャンネルを次々と替えていること」などは若い人ほど行なっている(図25)⁹⁴⁾。「つまらないと頻繁にチャンネルをかえて、興味あるところで止めておく。つまらなくてもテレビは消さない」(女性30代)、「興味のもてないときは何かないかなと思って結構チャンネルを回す」(男性30代)⁹⁵⁾というように、無目的に何となくいろいろな番組を見てしまう。つまり、一人でテレビを見ているときは、何はともあれまずテレビをつけ、自分のいる空間をテレビから流れる映像と音声で満たし、居心地のよい空間に仕立て、その中から自分の気になる箇所を断片的にすくい取っているのである。

図25 場当たり的な見方・つまみ見的な見方(年層別)
(よく十とときどきある)



(2) テレビは感覚器官

テレビに流れているその映像を見るかどうかを判断するのに、テレビ50年聞き取り調査では注目すべき回答として、「ツボにはまると見る」(女性30代)と答えた人がいた。しかし、その同じ人が「はまるツボは自分でもわからない」とも答えている。自分が見たい番組の視聴理由が述べられないというのは理屈で考えれば不思議なことである。だが、テレビを理屈や目的で見ているのではなく、感覚的または生理的に見ていると考えるとどうだ

ろうか。生理的な好き嫌いや感覚的な善し悪しは、言葉では説明できない境地である。

平野・中野(1975)は、「情報空間」に漬かりこむことによって形成された社会的性格をもつ人を「カプセル人間」と考えた⁹⁶⁾。そして「カプセル人間」のカプセル構造の一つに、情報をとらえる触覚として情報選択のフィルター装置が装備されているとした。そのフィルター装置は、ある種の情報を意味変換したのちに通過させ、さらに「固有の波長をもった情報を発信する。この波長に同調できるのは、若者文化に特有のコードをもった同じようなフィルター装置だけである」と述べている。当時の若者は現在では50歳くらいにまで達しており、「カプセル人間」は若者の間だけの話ではなく、ほとんどの人にあてはまるようになっただろう。つまり、現在ではみんなが情報選択のフィルター装置をもっているため、発信する波長が合わない人とテレビと一緒に見ると、テレビ視聴の波長が乱れると考えてよいだろう。

例えば、単なるチャンネル切り替えでも、タイミングが合わずイライラの原因になってしまう。「私が見入っていると、夫はすぐにチャンネルを替える」(女性40代)⁹⁷⁾と妻が夫への不満を漏らしている。妻と夫のテレビ波長が合わないようなことが昂じれば、人と一緒にテレビを見て不愉快になるよりも、いっそ一人で見たほうが精神衛生上好ましくなる。「父親が別の部屋で同じ番組を見ているということがある。コマーシャルの時間に席を立つのが一緒だったりすると、同じ番組を見ているのかなと感じることはある。でも、わざわざ部屋をのぞいて確認することはない」(女性30代)⁹⁸⁾というコメントに象徴さ

れるように、家族が同じ番組を見ていても一緒に見ようとはしない。テレビ視聴のリズムが合わない人とは、たとえ家族であっても一緒に見ない人さえいる。それほど、テレビが個人の生理やリズム、波長と結びついて見られているということであろう。

私たちは自分の周囲の空間をテレビから流れ出る映像と音声で満たし、その映像と音声から知識も、情報も、思考も、感情も、何もかもを摂取している。藤竹(1981)は、視聴の個人化が「人間が映像情報によって包み込まれる『映像の皮膚化』」を示すだろうと予期していた⁹⁹⁾。さらに牧田(2003)は、テレビは「社会の今を感じる身体的センサー」と化したと評している¹⁰⁰⁾。テレビは外界でおきている「現在」を私たちが感じるための感覚器官へと変質している。

M・マクルーハンがメディアを人間の感覚能力や運動能力を体外化したものとしてとらえた。テレビは、見る(視覚)という感覚能力が体外化され高度化されたメディアである。50年に渡るテレビとのつきあいの中で、はじめは視覚が体外化され高度化されたメディアであったテレビを、私たちは自分たちの身体に取り込んでしまったのかもしれない。そして今では、テレビと自分とが一体となっていることに違和感を感じずに生活しているのである。

おわりに

この論考のねらいを確認すると、これまでテレビが見られてきた家庭という場に注目し、テレビと家族の関係を、経済・社会状況をふまえつつたどることであった。テレビ・家族・社会の関係を勘案して区分した3つの時代ご

とに、テレビと家族の関係を簡単にまとめると次のとおりである。

【第1期】濃密な家族視聴の誕生

高度経済成長に支えられ、テレビは家庭に急激に普及し、戦後の新しい家庭の「核」として家族を1箇所を集めた。チャンネル争いを含め、家族のメンバーの間に交流があり、テレビを一緒に見ることで家族がまとまりを感じていた。そして「会話・食事・テレビ」の3つが合わさった“テレビ的”一家団らんが形作られた。

【第2期】個別視聴のきざしと家族視聴の変質

サブテレビの普及に伴い、見たい番組を別室で見るといった個別視聴が家族を分断しつつあった。それと同時に、家族の誰もが積極的に見ていないのにテレビがついているという、家族と一緒にいるためのテレビ視聴が併存していた。テレビは家族を分散をする一方で、白々しくなった家族をとりもつ役割を果たしていた。

【第3期】個別視聴の拡大とテレビとの団らん

生活の深夜化・24時間化、女性の社会進出などによる生活のズレや、家族と一緒にいるよりも自分の好きなように過ごしたいという気持ちのズレなどから、食事をはじめ家庭内で家族がそろいにくくなり、一家団らんはテレビの中に吸収された。人々は番組に出演しているタレントと団らんし、テレビをつけたままにすることで団らんの雰囲気自分のいる空間に満たしている。ゆえに、一人で見てもさびしくないし、テレビ視聴の波長が合わないならむしろ一人で見たいという人さえ

現われている。

以上が3つの時期の簡単な要約である(表5, 図26)。家族とテレビの関係の変化を一言でいうなら、テレビが「家庭内の家族娯楽」から「家族メンバーそれぞれの感覚器官」へと変質したことである。

戦後に登場したテレビは「家族でテレビを見ながら食事をし、またテレビを見ながら和気あいあいと会話をかわす」という“テレビ的”一家団らんを作ったが、家庭内のテレビ台数が増加すると、家族のメンバーは番組嗜好の違からテレビを一人で見るようになっていった。また、人々はドラマなどをとおして女性の自立や個人の平等などの考え方を知り、テレビは家族の個人化を後押しした。そして、常にテレビをつけ、テレビの映像と音声で自分のいる空間を満たし、テレビをとおして世の中のさまざまなものを——出来事も喜怒哀楽といった感情も——人々は吸収するようになった。

皮肉にも、“テレビ的”一家団らんを作ったテレビ自身が、一人で見るという視聴スタイルによって家族の分散を促してしまったのである。

家族視聴から個別視聴へ移りつつあるといっても、テレビが家庭で見られていることには変わりなく、日常生活におけるテレビという視点で、今後も家庭／家族とテレビの関係は継続すべきテーマだと考える。視点を変えれば、個別視聴が当たり前になればなるほど、どういう状況でなら家族視聴が成立するのか、どういう時なら人と一緒にテレビを見たいと思うのか、というアプローチが意味をもってくる。

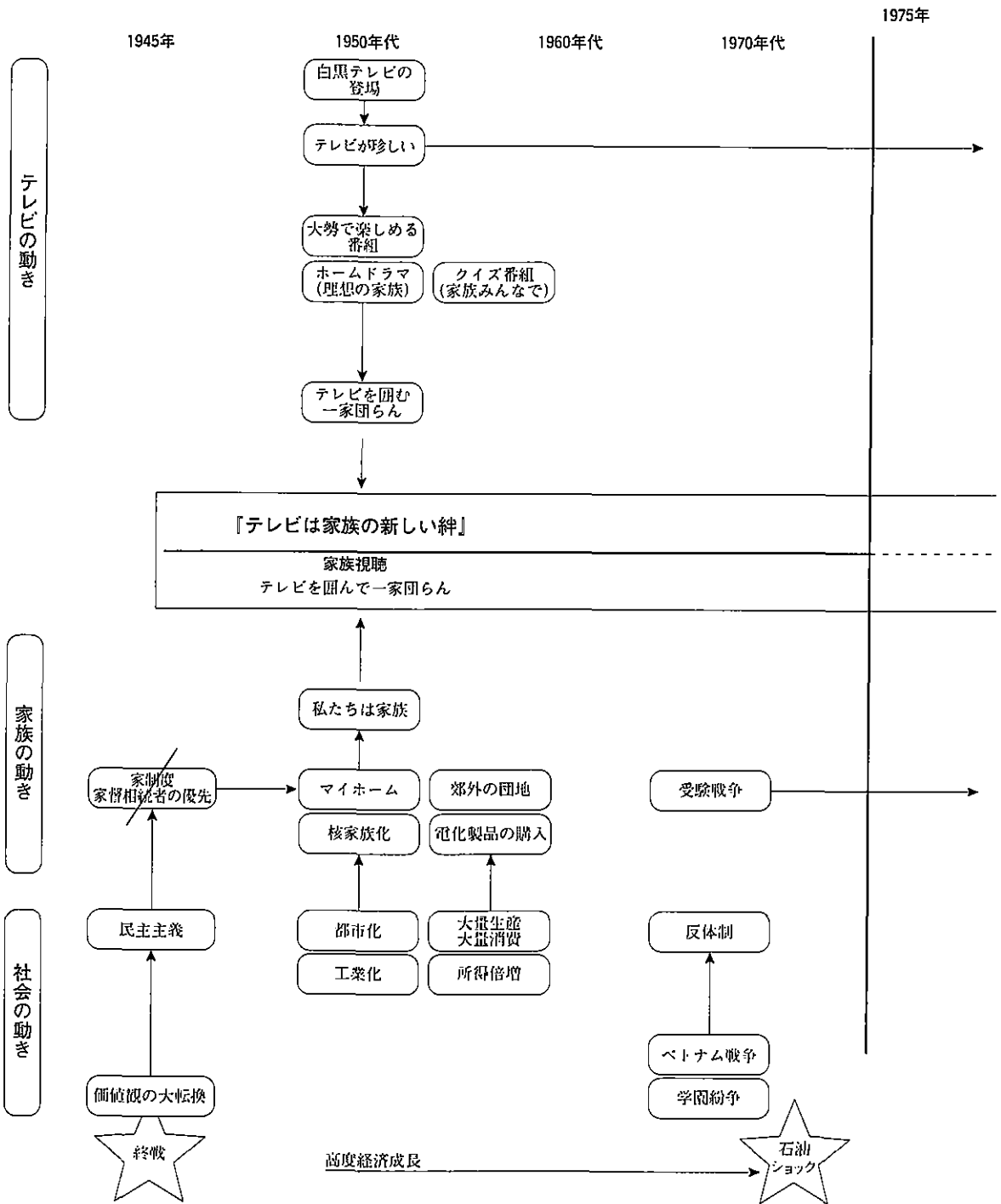
さらに、コミュニケーション行為としてのテレビ視聴を、その行動(視聴状況など)や態度(認識、評価など)だけでなく、テレビ視聴の舞台となる日常生活まるごと(日常生活行動や家族関係、嗜好、信条、価値意識など)も含めて広く捉えることも重要だと考える。心理学の「図と地」に例えれば、どういう「地」の上に「図」があるのかによって、「図」の見え方は異なってくる。テレビという「図」だけを見ようとしても、どういう「地」の上にあるのかを把握しなくては正確な「図」は見えてこない。しかも、Ⅲ章でみてきたように、人々にとってはテレビのほうが日常生活の「地」になってしまっている。「地」になっているテレビをどのようにして「図」として見るかが、今後のテレビ視聴研究の課題と考えている。

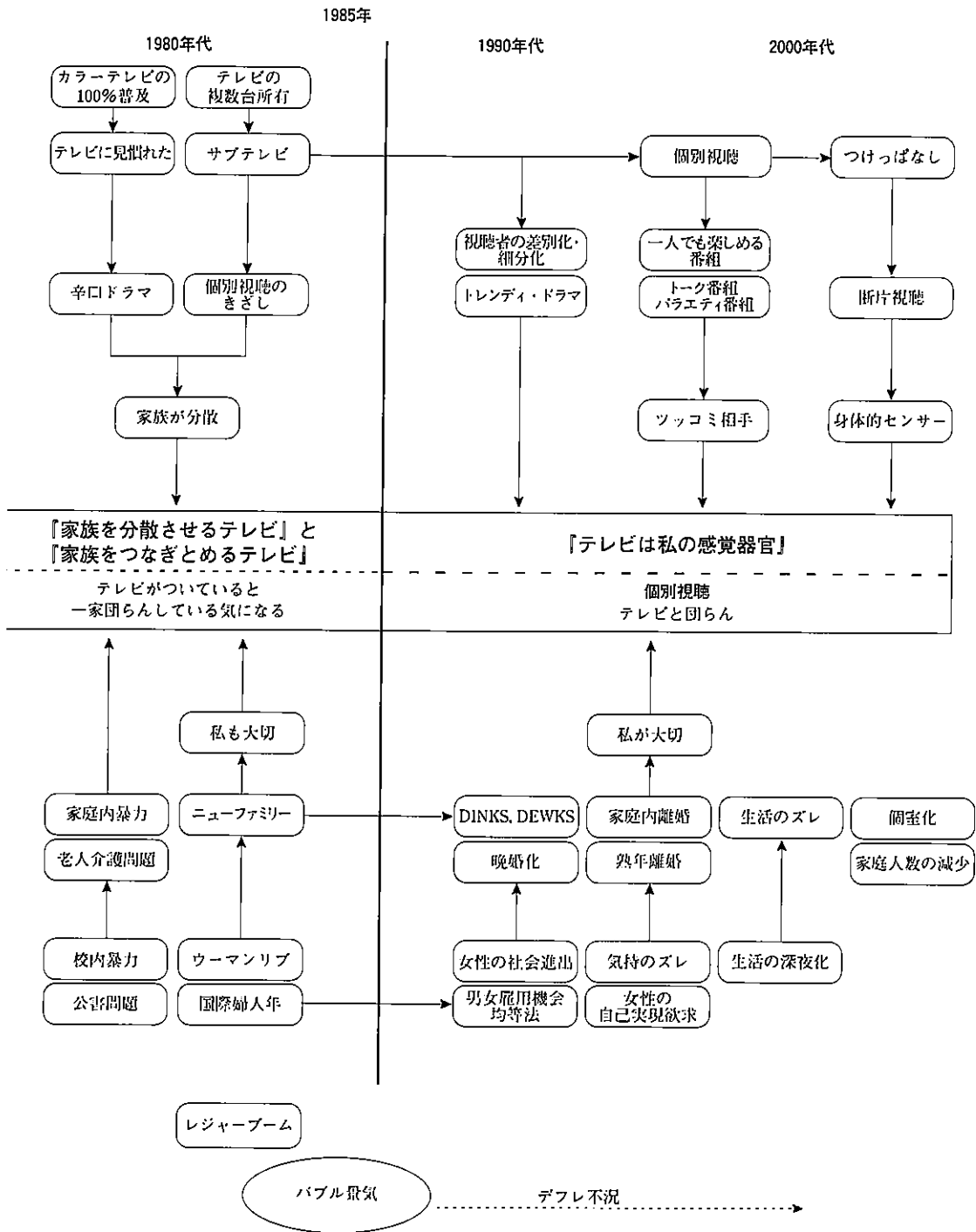
(いだ みえこ)

表5 まとめ

	家族に対するテレビの作用	団らんの舞台装置
第1期	凝集 ↓	会話+食事+テレビ ↓
第2期	つなぎとめる←→分散 ↓	食事+テレビ ↓
第3期	個別	テレビ

図 26 テレビと家族の50年





注・引用文献

(NHK実施の調査については、調査概要を以下の順に表記。なお調査相手の抽出は無作為抽出法による。調査主体名は省略。

調査時期 調査名 調査方法 母集団 調査対象
調査有効数)

- 1) 平田萬里遠・牧野宏子「川上行藏先生聞き書き—明治30年代越後長岡在の思い出—」『季刊人類学』14-1 1983年
- 2) 石毛直道「食卓文化論」『現代日本における家庭と食卓』国立民族学博物館研究報告別冊16号1991年
- 3) 井上忠司「茶の間文化論」『現代日本文化における伝統と変容Ⅰ 暮らしの美意識』(ドメス出版、1984年)
- 4) 2) に同じ
- 5) 熊倉功夫「食卓生活史の質的分析」『現代日本における家庭と食卓』国立民族学博物館研究報告別冊16号1991年
- 6) 5) に同じ
- 7) このように大きな価値観の転換によって食卓の雰囲気が変わったのは日本だけでなく、「中国では解放後になって、韓国では朝鮮戦争後になって、家族全員がおなじ食卓につくようになった」と石毛(1991)は指摘している。さらにこの現象を「世界が産業化することにともない、家庭生活が変貌し、家族という集団のようになってきた役割が変化したことによる、いわば人類史的な流れのなかでの出来事」と考察している。(石毛直道「食卓文化論」『現代日本における家庭と食卓』国立民族学博物館研究報告別冊16号1991年)
- 8) 2) に同じ
- 9) チャブ台は戦後も使われ続け、チャブ台での食事でも会話がなされるようになった。本稿では、戦後の食卓を象徴するものとしてダイニング・テーブルをとりあげている。
- 10) 食事が楽しいものになった要因として会話のほかに、井上(1999)は照明が明るくなったこと、食事のメニューが豊富になったこと、テーブルになり食事の正座という厳しいしつけがなくなったことをあげている。井上忠司「食事空間と団らん」『講座 食の文化 第5巻 食の情報化』(味の素食の文化センター、1999年)
- 11) 5) に同じ
- 12) 日本放送協会『20世紀放送史』2001年
- 13) 1955年5～6月 ラジオ聴取率調査 面接法 全国15歳以上 1,200人×9組 有効数1,100人前後
- 14) 藤竹暁「今日のラジオのきかれ方」『文研月報』NHK放送文化研究所 1963年11月号
- 15) 内閣府・消費動向調査 2003年調査の結果
- 16) 日本放送協会『20世紀放送史・資料編』2003年
- 17) 12) に同じ
- 18) NHK放送文化研究所『放送学研究8～10特集・日本におけるテレビ普及の特質』(日本放送出版協会、1964年～1965年)
- 19) 17) に同じ
- 20) 18) に同じ
- 21) 「思い出の番組アンケート」より 2002年10月テレビ50年調査の有効回答者に実施 郵送回収自由記述 年齢は調査時点
このアンケートは、テレビが家にやってきたころの様子や当時見ていた番組についての思い出などのエピソードを知るために行った。
- 22) 藤竹暁「テレビと家庭生活」『現代のエスプリ放送文化』No.208(至文堂、1984年)
- 23) 小川文弥「家庭生活とテレビ—「テレビ30年」を考える—」『国民生活研究』第23巻第1号 1983年6月
- 24) 高橋勇悦「家郷喪失の時代 新しい地域文化のために」有斐閣選書(有斐閣、1981年)
- 25) 見田宗介「新しい望郷の歌—現代日本の精神状況—」『現代日本の心情と論理』(筑摩書房、1971年)
- 26) 加藤秀俊「テレビジョンと娯楽」『テレビ時代』(中央公論文庫、1958年)
- 27) 民放系列については、関東の局名で代表させた
- 28) 岩男壽美子『テレビドラマのメッセージ 社会心理学的分析』(勁草書房、2000年)
- 29) 21) に同じ
- 30) 村瀬敬子「お茶の間」という空間—クイズ番組と一家団らん」『クイズ文化の社会学』(世界思想社、2003年)
- 31) 滝沢正樹「集団的な人間主義へ—ともに遊ぶ方法の創造ということ」『放送文化』1966年3月号
- 32) 1960年10月、1965年10月 国民生活時間調査 面接法 全国10歳以上
詳細については『日本人の生活時間2000』(NHK出版、2002年)を参照のこと。
- 33) テレビにその座を奪われたラジオは、独自の道を探ることになる。その1つが、ラジオの小型

- 化に伴う「個人聴取」と「聴取者の細分化」である。ラジオを個人で聴くことを前提とし、時刻と年層別の聴取者をセットにした編成が考え出された。このような動きは、のちのテレビ編成を先取りするものであった。12)より
- 34) NHK放送世論調査所編『テレビ視聴の30年』(NHK出版, 1983年)
- 35) NHKの全日放送は1962年開始(6:28~23:50)
- 36) 「団らん」「団らんする」「一家団らん」の定義は、小学館 日本語大辞典(第二版)より
- 37) 1957年11月 テレビ意向調査 面接法 京浜地区15歳以上のテレビ所有者 3,600人
- 38) 21)に同じ
- 39) 1969年12月 放送に関する世論調査 面接法 全国15~69歳 3,600人 有効数2,581人
- 40) 1975年2月 日本人とテレビ文化調査 面接法 全国15歳以上 3,600人 有効数2,625人
- 41) 民放五社調査研究会『日本の視聴者』(誠文堂新光社, 1966年)
- 42) 1960年10月より5年ごと 国民生活時間調査 面接法または配付回収法 全国10歳以上 詳細については『日本人の生活時間2000』(NHK出版, 2002年)を参照のこと。
- 43) 1967年11月 全国テレビラジオ番組意向調査 面接法 全国10~69歳 3,600人 有効数2,637人
1974年3月 今日のテレビ調査 面接法 全国15歳以上 3,600人 有効数2,526人
1982年10月 テレビ30年調査 面接法 全国16歳以上 3,600人 有効数2,737人
- 44) 21)に同じ
- 45) 1975年10月, 1980年10月, 1985年10月 国民生活時間調査 配付回収法 全国10歳以上 詳細については『日本人の生活時間2000』(NHK出版, 2002年)を参照のこと。
- 46) 1970年6月 全国視聴率付帯意向調査 面接法 全国13~69歳 3,600人 有効数2,356人
1977年3月 視聴動向に関する調査 面接法 全国15歳以上 2,206人 有効数1,681人
1979年12月 日本人とテレビ調査 面接法 全国16歳以上 5,400人 有効数4,038人
1982年10月 テレビ30年調査 面接法 全国16歳以上 3,600人 有効数2,737人
- 47) 「一人だけで見るほう」を、家族とは別に見るという意味で「個別視聴」とする。
- 48) 1977年12月 日本人のテレビ視調査 面接法 全国20歳以上 3,600人 有効数2,615人
- 49) 1971年~ 全国個人視聴率調査(6月期)付帯質問 配付回収法 全国7歳以上 3,600人
- 50) テレビの複数台所有以外にも、個室数の増加や世帯人数の減少も、テレビの個別視聴を後押ししている。
- 51) 1979年1月 家族とテレビ調査 配付回収法 東京30キロ圏夫婦2人以上の2,000世帯 有効数1497世帯
- 52) 51)に同じ
- 53) 1984年12月 現代の家族調査 面接法 全国16歳以上 3,600人 有効数2,501人
- 54) 三浦 展「郊外・家族・テレビー成熟と創造」『放送文化』1994年2月号
- 55) 村松泰子・牧田徹雄「今、テレビドラマは何を描いているのか」『放送研究と調査』1985年9月~11月号
- 56) 53)に同じ
- 57) 厚生労働省・人口動態統計
- 58) 1973年から5年ごと 日本人の意識調査 面接法 全国16歳以上 5,400人 詳細については『現代日本人の意識構造・第5版』(NHK出版, 2000年)を参照のこと。
- 59) 58)に同じ
- 60) 51)に同じ 視聴時間は核家族(夫、妻、子)のテレビ全体・夜間(18:00~24:00)の週平均
- 61) 1977年12月 全国放送意向調査 面接法 全国15歳以上 2,206人 有効数1,662人
- 62) 本田妙子・牧田徹雄「家族とテレビⅡ」『放送研究と調査』1979年8月号
- 63) 見田宗介「現代日本の感覚変容 一夢の時代と虚構の時代」『現代日本の感覚と思想』(講談社, 1995年)
- 64) 1979年12月 日本人とテレビ調査 面接法 全国16歳以上 5,400人 有効数4,038人
- 65) 1977年3月 視聴動向に関する調査 面接法 全国15歳以上 2,206人 有効数1,681人
- 66) 51)に同じ
- 67) 加藤春恵子「『相互作用』としてのテレビ接触—「受け手」の視点から—」『放送文化』1972年12月号
- 68) NHK放送世論調査所編「テレビが一家団らんにもたらしたもの」『家族とテレビー茶の間のチャンネル権』(NHK出版, 1981年)
- 69) 1992年10月 テレビ40年調査 面接法 全国16歳以上 3,600人 有効数2,593人
2002年10月 テレビ50年調査 面接法 全国16

- 歳以上 3,600人 有効数2,272人
- 70) 1985年3月から5年ごと 日本人とテレビ調査
面接法 全国16歳以上 3,600人
詳細については、「日本人とテレビ2000」『放送
研究と調査』2000年8月号を参照のこと。
- 71) 1979年1月 家族とテレビ調査 配付回収法
東京30キロ圏夫婦2人以上の2,000世帯 有効数
1,497世帯
2002年1月 家族の中のテレビ調査 配付回収
法 東京30キロ圏夫婦2人以上の1,600世帯 有
効数1,085世帯
特定1週間の夜間の視聴実態(18:00~24:00)
なお子どもが複数の場合、1人でも見ていれば
「子どもは視聴」とした。
- 72) 総務省・国勢調査 普通世帯
- 73) 1971年~ 全国個人視聴率調査(6月期)付帯
質問 配付回収法 全国7歳以上 3,600人
- 74) 2002年1月 家族の中のテレビ調査 配付回収
法 東京30キロ圏夫婦2人以上の1,600世帯 有
効数1,085世帯
- 75) テレビ50年聞き取り調査 2003年3月実施 相
手は首都圏在住の男女14人 年齢は調査時点
現在のテレビの見方についての聞き取り調査で、
第1期や第2期にはみられなかった新しいテレ
ビの見方の特徴を具体的に把握するために実施
した。聞き取り相手はとくに新しい特徴を持っ
ている人としたため、象徴的な回答となっている。
- 76) 2000年10月 国民生活時間調査 配付回収法
全国10歳以上
詳細については『日本人の生活時間2000』(NHK
出版、2002年)を参照のこと。
- 77) 1997年10月 家族についての世論調査 面接法
全国16歳以上 3,600人 有効数2,494人
- 78) 足立己幸ほか『知っていますか、子どもたちの
食卓』(NHK出版、2000年)
- 79) 1987年12月 現代の視聴者調査 面接法 全国
16歳以上 3,600人 有効数2,433人
- 80) この質問は、1991年以前は、有効回答者全員に
尋ねている。1992年以降は、日頃の生活の中
での程度充実感を感じているかという質問対
し、「十分充実感を感じている」、「まあ充実感
を感じている」、「あまり充実感を感じてい
ない」、「どちらともいえない」と回答した
人に尋ねている(つまり、「ほとんど(まったく)
充実感を感じていない」、「わからない」と
回答した人を除く)。
- 有効回答者に占める該当者の割合は以下のと
おり。
- | | | | |
|-------|-----|-------|-----|
| 1992年 | 95% | 1997年 | 92% |
| 1993年 | 93% | 1999年 | 88% |
| 1994年 | 93% | 2001年 | 90% |
| 1995年 | 92% | 2002年 | 93% |
| 1996年 | 93% | 2003年 | 94% |
- 81) 77)に同じ
- 82) 77)に同じ
- 83) 小此木啓吾は、「家庭は、外で働き、他人とつき
あって、くたびれはてた家族が休養し、好き勝
手に気ままな暮らしをするところだとみんなが
思っている家族」のことを「ホテル家族」と呼ん
でいる。『家庭のない家族の時代』(ちくま文庫、
1992年 初出は1983年)
- 84) 小此木啓吾は、テレビのタレントなどとの親密
感が高まっている傾向を「現実感の逆転」または
「親密感の逆転」と呼んでいる。『視界ゼロの家
族』(海竜社、1996年)
- 85) 村瀬敬子『「お茶の間」という空間』『クイズ文化
の社会学』(世界思想社、2003年)
- 86) 2002年10月 テレビ50年調査 面接法 全国16
歳以上 3,600人 有効数2,272人
- 87) 75)に同じ
- 88) 86)に同じ
- 89) 1997年3月 テレビと情報行動調査 配付回収
法 全国16歳以上 3,600人 有効数2,947人
- 90) 75)に同じ
- 91) 友宗由美子・原由美子『「時間快適化装置」とし
てのテレビ』『放送研究と調査』2001年11月号
- 92) 75)に同じ
- 93) 89)に同じ
- 94) 89)に同じ
- 95) 75)に同じ
- 96) 平野秀秋・中野収『コピー体験の文化』(時事通
信社、1975年)
- 97) 75)に同じ
- 98) 75)に同じ
- 99) 藤竹暁「テレビ文化環境論」『放送学研究33』
NHK放送文化研究所1981年
- 100) 牧田徹雄「テレビとメディア・コミュニケーション
の変化」『マスコミュニケーション研究63』
2003年